

茨城県稲敷郡美浦村

興津白井遺跡

— 美浦村水処理センター建設に伴う埋蔵文化財の調査 —



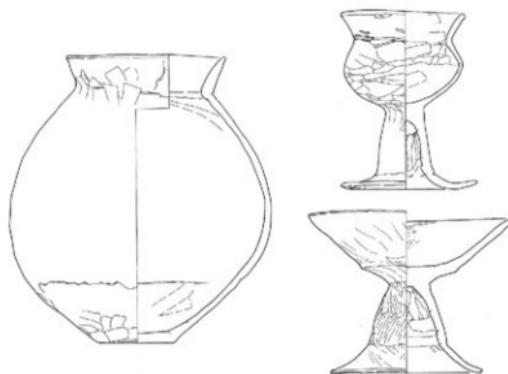
2000.3.31

美浦村教育委員会
美浦村興津白井遺跡調査会

茨城県稲敷郡美浦村

興津白井遺跡

— 美浦村水処理センター建設に伴う埋蔵文化財の調査 —



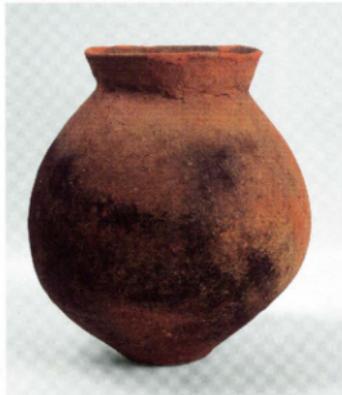
2000.3.31

美浦村教育委員会
美浦村興津白井遺跡調査会

口絵 1 第3号住居址出土遺物①



口绘2 第3号住居址出土遗物②



序

霞ヶ浦南岸という気候温暖な立地にある美浦村には、谷津田に代表される里山をはじめ、人々が嘗々と築いてきた豊かな環境が今なお残されています。それははるか太古に遡る頃からのものであり、自然から謙虚に学んだ人間の英知がそこに集約されています。遺跡として大地に刻まれた祖先の痕跡は、いわばその時々の人間の英知を知る手がかりが記憶されている場所であり、今日に至るまでの正に“足跡”と言うことができるでしょう。

記憶を呼び起こす手段の一つとして発掘調査があります。今回興津地区において村の水処理センターを建設するため事前にその手段を講ずることとなりました。現代の英知を築くためには過去の英知も学ばなければなりません。この調査により旧石器時代以来の足跡が残されていることが判明し、歴史の断層にまた新たなひとこまを挿入することができました。記憶をより鮮明なものにするためには、これからもひとつひとつ丹念な資料の蓄積が必要です。二十一世紀を担う子供達のためにもこうした身近にある祖先の英知に触れる機会を設け、自分達の記憶として活用されることを願って止みません。

最後になりましたが、本発掘調査において終始懇切なご指導、ご協力を頂いた茨城県教育庁文化課、茨城県上木部都市局下水道課、村下水道課の諸氏をはじめ、厳しい暑さの中、ひたむきに調査に従事していただいた地元の皆さんにお礼申し上げて、報告書刊行の辞に代えさせていただきます。

平成12年3月

美浦村興津白井遺跡調査会

会長 美浦村教育長 塚本 和夫

例　　言

- 1 本書は、茨城県稻敷郡美浦村大字興津字白井 969 番地外地内に所在する興津白井遺跡にかかる、美浦村水処理センター建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査の主体者は美浦村興津白井遺跡調査会で、調査組織は以下のとおりである。

会長　塙本和夫（美浦村教育長）
理事　飯塙　廣（美浦村文化財保護審議会会長）
　　青野克美（美浦村下水道課係長）
監事　村崎友春（美浦村生涯学習課課長）
　　黒沢義明（美浦村下水道課長）
幹事　岡田　守（美浦村生涯学習課文化財係長）
　　川村　勝（美浦村生涯学習課学芸員・調査担当者）
　　中村哲也（美浦村生涯学習課学芸員）
　　馬場信子（美浦村生涯学習課学芸員）

- 3 調査参加者は以下のとおりである。

現地調査　宇尾貴代美、川去ふみ子、小谷明、椎塙隆二、須貝洋子、千田清、長島裕美、久田雅喜、藤村千代美、増田明美、山下裕子
整理作業　川去ふみ子、小谷明、椎塙隆二、須貝洋子、久田雅喜、増田明美、谷畠節子、山下裕子

- 4 本書作成にあたって、石材については茨城県立自然博物館の遠藤好氏に同定をお願いし、炭化材の樹種同定、テラフ分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に、第3号住居址土師器完形品の実測・トレースについては株式会社シン技術コンサルにそれぞれ委託した。
- 5 本書の編集・執筆は付属を除き川村が行った。
- 6 調査に関わる図面・写真・出土品等の資料は美浦村教育委員会が一括して保管している。
- 7 出土品の注記には遺跡略号「OS」を用い、それぞれ住居址は「J」、上坑は「D」、溝は「M」、縄文時代調査区は「J区」、炭窯は「炭か？」を付し、以下に出土位置を注記している。ただし竪穴状遺構については現場調査時に使用していた第1号住居址の略号「IJ」をそのまま注記している。なお採集資料は「OS表採」と注記した。
- 8 現地調査から本書の刊行に至るまで下記の諸氏、諸機関にご指導、ご協力を賜った。記して感謝する次第である。（敬称略、五十音順）
阿部有花、石川功、恩田勇、木村愛子、木村正、黒澤春彦、小泉堅三郎、閑口満、高橋嘉朗、辻本崇夫、長澤勲、比気君男
茨城県教育庁文化課、茨城県土木部都市局下水道課、陸平調査会、土浦市上高津貝塚考古資料館、伸和エステート株式会社、スタジオ・ナギー、美浦村下水道課

凡　　例

本書における図中、表中の表記は、特に指示の無い限り下記の事項を示す。

- 1 遺物実測図中に付された斜線トーンは、石器は節理面を、土器類は割れ口を示す。
- 2 上器類の断面実測に付されたトーンは縄文時代の織維上器、須恵器を示す。
- 3 遺構平面図あるいは断面図に付された色の濃いトーンは焼上、燃焼部を示す。
- 4 平面図、断面図中の「K」は搅乱を示す。
- 5 石器の計測について、旧石器に関して「長さ」、「幅」は剥片剥離軸を基準として長方形を想定して計測し、「厚さ」は最も厚い箇所を選び主要剥離面側から垂直に計測。縄文以降の石器についてはそれその最大値を計測。
- 6 本書掲載の実測図の縮尺は、住居址・土坑・竪穴状遺構・炭窯状遺構の平面図・断面図は1／60、溝状遺構平面図1／200、住居ピット類・竈・溝状遺構の断面図は1／40、縄文時代調査区は1／80、第3号住居址遺物出土状況は1／20である。遺物は旧石器が4／5、第3号住居址土師器完形品類が1／4で、他はすべて1／2である。

目 次

口 紋

序

例言・凡例

目 次

I 遺跡の立地と歴史的環境 -----	1
興津白井遺跡の位置と地形／興津白井遺跡の歴史的環境	
II 調査の経過と概要 -----	5
調査に至る経緯／調査の方法／調査経過／調査の概要	
III 検出された遺構と遺物	
1 旧石器時代・縄文時代の遺物 -----	7
旧石器時代の概要／出土した石器／縄文時代の概要／出土した縄文土器	
2 古墳時代の遺構と遺物 -----	20
第3号住居址	
3 平安時代の遺構と遺物 -----	24
第2号住居址	
4 その他の遺構と遺物 -----	26
竪穴状遺構／第1号土坑／第2号土坑／溝状遺構／炭窯状遺構	
IV まとめ -----	32
付 編 興津白井遺跡における自然科学分析 -----	33
付 表 -----	39
写真図版 -----	49
報告書抄録 -----	63

I 遺跡の立地と歴史的環境

興津白井遺跡の位置と地形

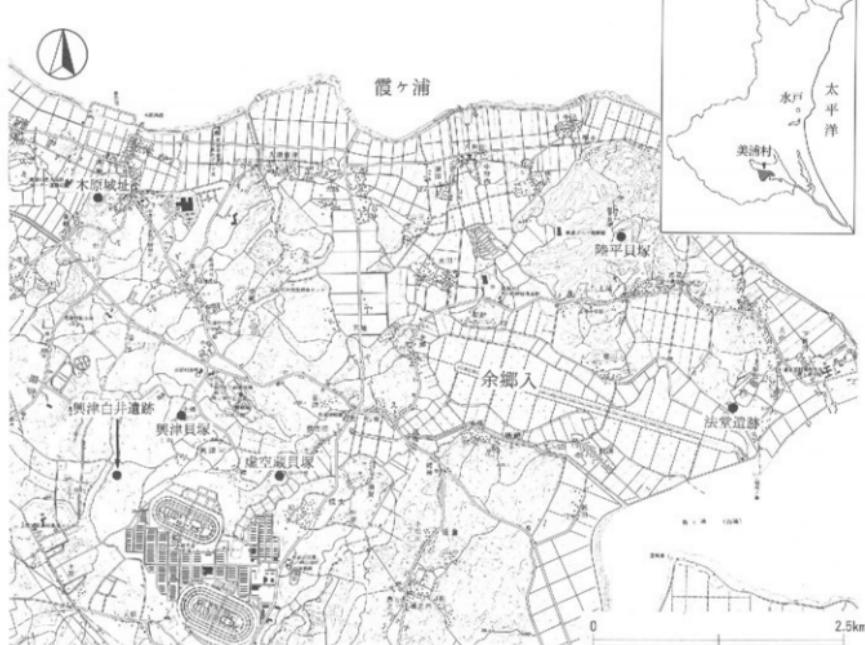
興津白井遺跡は霞ヶ浦の南岸、茨城県稲敷郡美浦村に所在する（第1図）。その位置は美浦村役場より南東へ1.4km行った標高27m程の舌状台地上にあり、南側を除く周囲は谷津により画されている（第2図）。現況は山林で駿後しばらくは畠地として利用されていた。遺構が検出されたのは台地平坦部から緩斜面部にかけてで、周囲の谷底との比高は12m程である。

美浦村の地勢を概観すると、北と東が霞ヶ浦に面し、湖岸を中心に広がる沖積地と樹枝状に発達した谷地形が目立つ標高20～30m程の稻敷台地からなる。村の東部には余郷入干拓地と呼ばれる地区が見られるが、その名の通りかつてここは東から西へ湧入していた霞ヶ浦の人江であった。また本村に関する稲敷台地を見てみると、余郷入へ流下する主谷により南北に大きく分断されている様子が見て取れる（第4図）。その主谷の最奥部付近に遺

跡は位置している。

本遺跡を較せる稲敷台地の平坦地形は、約14万年前の下末吉海進により形成され、その後の海退により陸地化されたものである。現在谷津田として利用されている周辺の谷地形は、約2万年前の最終氷期最寒冷期を極大とする海退現象により台地が浸食され谷が刻まれたものであり、その谷底が今のように平らな地形になったのは約六千年前の縄文海進期の堆積物の埋積による。つまり現在見られる風景の原形は縄文時代に形成されたと言うことができるだろう。

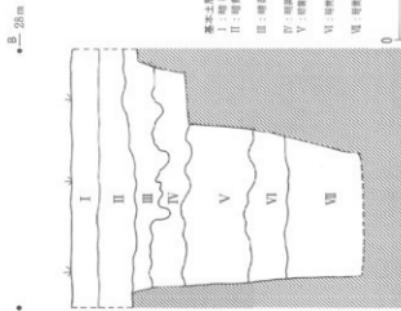
本遺跡の地形は先程述べたように下末吉期に形成されたものであるが、その後はその地形に規定される形で関東山地の火山活動による火山灰が厚く堆積する。第3図は遺跡地の基本土層を示したものである。上位より、I層は30cm程の表土層で、本層中からは浅間Bテフラに由来する鉄石が多量に検出されている（付編参照）。II層は30～40cm程の厚さの縄文時代の包含層。III層は20～30cm程のローム質土層で、漸移的な層相を示す。IV～VII層は120cm程のローム層で、下部ほど粘性が強くなる（註）。



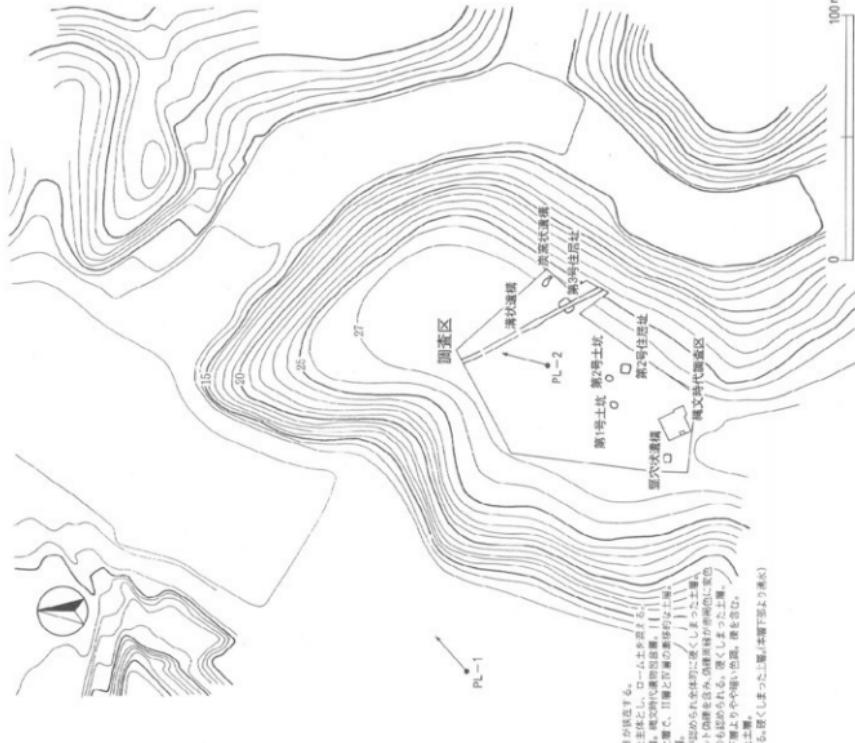
第1図 遺跡位置図



PPL-1 主谷より遺跡（右台地上）を望む



第3図 基本土層図（縄文時代調査区深掘部）



第2回 遊撲配置図

基本土層を確認するため行った深掘地点では途中湧水を見たため以下の土層は不明で、下末吉期の堆積層を確認することができなかったが、標高25mの斜面部に位置する溝状遺構南東端から白色系の粘土（6層※溝状遺構断面図参照）及びその上位に暗黄褐色の粘質土（5層※同）が検出されているので、相互の標高値から判断して5層がⅦ層に、6層が下末吉期の堆積層に相当すると考えられる。

（註）層序はあくまで本遺跡地のみに限った観察によるもので、茨城県教育財團旧石器時代研究班により提示された茨城県南部における層序区分（旧石器時代研究班1995）は考慮していない。広域層序の対比の必要性は十分認識しており、そのためには統一した基準で観察すべきであった。様々な制約で今回は果たせなかつたが、基本土層からテフラ分析を念頭においた連続サンプルを採取しており、また村内他遺跡からのサンプルも蓄積しているので、今後機会を見てそれらの分析を実施したいと考えている。

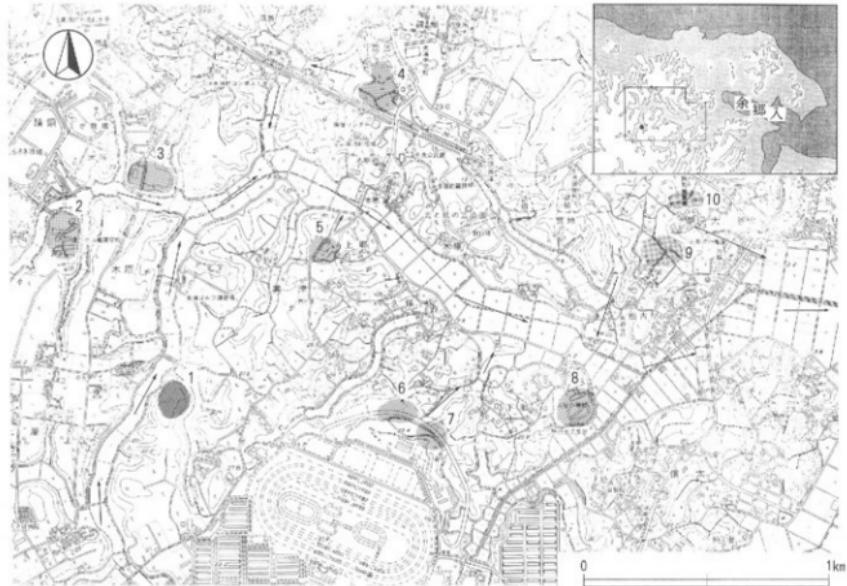
（参考文献） 旧石器時代研究班「茨城県南部における立川ローム層の層序区分について」『研究ノート6号』茨城県教育財團（1995）

興津白井遺跡の歴史的環境

前節で触れたように、本遺跡を載せる稲敷台地は西方へ大きく湧入する形で浸食されており、この主谷は美浦村における主要な水系となっている（第4図）。本村での遺跡の分布の特徴を見てみると、霧ヶ浦を望む台地上に分布する遺跡と先の主谷沿いの台地上に分布する遺跡が見られる。村内の著名な遺跡を見てみると、前者は縄文時代中・後期を中心とした陸平貝塚、縄文時代から古墳時代の集落址、中世城郭を中心とした木原城址、縄文時代の製塙遺跡である法堂遺跡、後者では縄文時代前期の興津貝塚、縄文時代前・中期の虚空藏貝塚等が知られている（第1図）。その他現在までに調査、確認されている遺跡のほぼ全てがどちらかの水系に属していると言っても過言ではない。

ここでは興津白井遺跡（1）が位置する主谷沿いの遺跡について、本遺跡と重なる時代を中心に概観する（第4図）。

旧石器時代は村内を含めても調査例が少なく、また他時代遺構覆土から検出、確認される場合が多い。本遺跡資料もそうであるが、他に虚空藏貝塚（8）から貞岩製の剣片が採集されている（註）。旧石器時代の遺跡の在り



第4図 周辺の遺跡

方についてはなお不明な点が多く、最終水期における遺跡立地を検討する必要があるだろう。縄文時代では前期の奥津貝塚（5）、前・中期の虚空蔵貝塚、早・中期の大谷貝塚（9）等貝塚を作った遺跡が主谷開口部を中心に散在するが、縄文海進時に主谷のどのあたりまで海進の影響があったか、今後の課題である。ちなみに「奥津」は「奥津」から転訛した地名である。古墳時代中期では常陸笛山遺跡（2）、野中遺跡（4）が知られているが、いずれも小規模な遺跡で本遺跡の在り方と共に通する。平安時代では摩蓮陀遺跡（3）、原畠遺跡（7）、稻荷山遺跡（6）、大谷谷津台遺跡（10）がこれまで発掘調査された。本遺跡では住居址1基が検出されたのみで、しかもほとんど遺物が見られないという他と異なる在り方を示す。

本遺跡は中心となる時代を抽出することが困難で、強いて挙げれば住居址がそれぞれ1基検出された古墳時代中期、平安時代を指摘するくらいで、遺跡の性格が問われるところである。また、平成11年度に行われた村内遺跡分布調査では本遺跡以南の主谷周辺台地では遺跡が確認できなかった。したがって現在のところ本遺跡が主谷最奥部の遺跡ということになる。

（註）美浦村文化財保護審議委員小泉堅三郎氏にご教示いただき、現在同氏が保管されている遺物を確認した。

II 調査の経過と概要

調査に至る経緯

平成10年9月18日、茨城県教育庁文化課より美浦村興津地区で計画されている水処理センター予定地内における埋蔵文化財（以下「遺跡」とする）有無の問い合わせがあった。これは茨城県都市計画審議会で同センターの案件が取り上げられるので、事前に遺跡の情報を把握しておきたいという文化課の要請である。これを受け即日村教育委員会では水処理センター事業の主管である村下水道課に連絡を取り、早々に協議を行うことになった。

9月22日、下水道課と遺跡に関する協議を持ち、主に今後のスケジュールを軸に話を進めた。現時点では予定地内に遺跡は確認されていないが、地形、立地、周辺の遺跡の状況などから遺跡が存在する可能性が極めて高く、教育委員会からの要望として事前に試掘調査を実施したい旨伝えた。下水道課側もその点を良く理解し、県の都市計画審議会が10月21日に開催されるのでその前に現地調査を実施し、県に回答することになった。

9月25日、教育委員会は下水道課職員の協力を得て現地の試掘調査を実施した。現況は山林で、篠竹のブッシュに覆われており調査は難航した。テストピット（約1m×1m）設定に際しても地形が全く読めず、掘削箇所の確保にも難儀したが、それでも手振りで10ヶ所程度のテストピットが設定できた。結果はいずれからも遺構・遺物は検出されなかった。この調査結果を受け県への回答について協議したが、今回の悪条件での調査では確実な回答はできないと判断、再度時期をみて試掘調査を実施することを確認し、県へはその旨回答することとした。

平成11年5月6日、現地の再試掘調査を実施した。今回は現地の伐採を済ませており、地形も容易に把握することができた。前回の試掘調査で得られた土層データを基に試掘にはバックホーを使用し、台地平坦部から緩斜面部を中心tronchを設定した。調査の結果、緩斜面部を中心に竪穴状の遺構、縄文土器を検出した。この結果を受け、新発見の遺跡ということで事業主である美浦村は文化財保護法（以下「法」という）第57条の6第1項に基づく「遺跡発見の通知について」を茨城県教育委員会へ提出した。

その後、村教育委員会と村下水道課で遺跡の保存について協議を重ねたが、水処理センターという性格上、台地を現水田面レベルまで切り下げる必要があること、ま

た現建設予定地逆算までは紅茶転折があり、今後新たな用地を確保することは困難であることなどから、遺跡の現状保存は難しいという結論となり、遺跡保存に関しては発掘調査による記録保存で対応して欲しいという要望であった。また調査の時期であるが、センター建設は平成13年度着工ということであるが、事前に用地の切土を行なう必要があるのでその期間を考慮すると、本年度中に現地の発掘調査を終了させることができ望ましいということであった。

この協議を受け美浦村では法第57条の3第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知について」を県教育委員会へ提出し、同時に村教育委員会では調査に向けて諸準備を進めた。後日、県教育委員会より「周知の埋蔵文化財発掘地における土木工事について（通知）」が送付され、工事着手前の記録保存発掘調査が指導された。

村教育委員会では教育長を会長とする美浦村興津白井遺跡調査会を組織し、美浦村と「美浦村興津白井地区埋蔵文化財に関する協定書」および「美浦村興津白井地区埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を取り交わした。

美浦村興津白井遺跡調査会は法第57条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘調査の届出について」を県教育委員会へ提出し、平成11年6月14日より発掘調査を開始した。

調査の方法

調査区の設定にあたっては、試掘調査で遺構が確認された範囲を中心にして設定した。調査区面積は約5000m²である。

調査区ではまず表土層であるI層をバックホーにより除去した。各遺構は基本的にまずプランを確認した後、サブレンチにより覆土や掘り方の状況を捉え、土層観察用の鉛筆を残しながら、そこで観察された土層ごとに発掘を進める方法を探った。遺物については層位ごと、便宜的に遺構内を区画した平面区ごとの取り上げを基本としたが、遺棄、廃棄されたことが明瞭なものについては出土位置と標高、出土状況等を図面、写真に記録している。縄文時代調査区については検出された遺物全てについて位置と標高を記録した。なお検出された遺物の取扱い、特に完形土器の内部充填土、管状土錘の孔内に残されている土については後日整理作業において精査する心算があったので、特に作業員さんにその取扱いには注意してもらつた。遺構平面図作成に当たっては平板を用い、測量スケールは、平面図・断面図とも1/20を基本とした。ただし縄文包含層遺物ドット図は1/40、溝状遺構

の平面図は1／100で作成した。記録写真には35mmカメラを用い、カラーリバーサル、モノクロフィルムでそれぞれ同じカットを撮影している。

調査の経過

現地調査（調査日誌抄録）

平成11年

- ・6月10日 発掘現場へ器材搬入。
- ・6月11日 公募した発掘調査補助員（作業員）への作業説明会（美浦村中央公民館にて）。
- ・6月12日 調査現場表上割立ち会い。
- ・6月14日 調査開始。主に遺構確認作業。
- ・6月15日 第1号住居址（竪穴状遺構）、第2号住居址にサブトレレンチ設定。
- ・6月17日 第1号住居址土層断面図作成、写真撮影、平面図作成。第2号住居址よりほぼ完形の須恵器壺蓋出土。第3号住居址より完形の高坏、甕出土。
- ・6月18日 雨天のため調査中止。
- ・6月22日 第2号住居址土層断面図作成、写真撮影。第3号住居址より完形高坏2個体、完形甕1個体出土。溝状遺構、第1号土坑調査。
- ・6月24・25日 雨天のため調査中止。
- ・7月1日 第3号住居址平面図作成。第1号土坑写真撮影。第2号土坑、溝状遺構調査。
- ・7月5日 溝状遺構全景写真撮影。縄文時代調査区設定、包含層調査。炭窯状遺構平面図作成、写真撮影。
- ・7月9日 村郷土史講座受講生発掘体験。
- ・7月12～15日 雨天および現場状況不良のため調査中止。
- ・7月19日 縄文時代調査区調査。深掘部土層断面写真撮影。炭窯状遺構調査。
- ・7月21日 縄文時代調査区遺物記録作業。深掘部土層断面図作成。深掘部上層サンプル採取。本日で現地発掘調査終了。
- ・7月27日 現場器材撤収作業。

（現場発掘調査実働日数18日間、延べ作業員数181人）

- ・以後調査担当者による整理作業（遺物実測、写真撮影、トレイス、原稿執筆等報告書作成に関する作業）を平成12年2月まで断続的に実施。

調査の概要

今回発見された遺構は、調査区東側の台地平坦部から緩斜面部を中心にはめ出されている。内訳は古墳時代中期の住居址が1基（第3号）、平安時代の住居址が1基（第2号）、時期不明の竪穴状遺構が1基、土坑2基（第1、2号）、溝状遺構1条、近世に比定される炭窯状遺構が1基である。なお遺構ではないが縄文時代の遺物包含層（II層）が確認されている。それそれの遺構は一部不明なものもあるが、基本的にII層以下の土層を掘り込んで構築されていた。

遺物については、遺構内、採集資料を中心に縄文土器片825点、土師器片236点、須恵器片6点、陶器片1点、土製耳飾1点、球状土鍤12点、土製円盤1点、削片23点（頁岩・玉隨・凝灰岩・硬砂岩・泥岩・黒曜石）、打製石器1点（硬砂岩）、スタンプ形石器1点（石英粗面岩）、磨石1点（硬砂岩）、礫28点（内10点は赤化）が出土している。

整理作業

- ・9月1～30日 作業員を雇用しての基礎整理作業（洗浄・注記・復元・拓本）。

（基礎整理作業実働日数19日間、延べ作業員数145人）

III 検出された遺構と遺物

1 旧石器時代・縄文時代の遺物

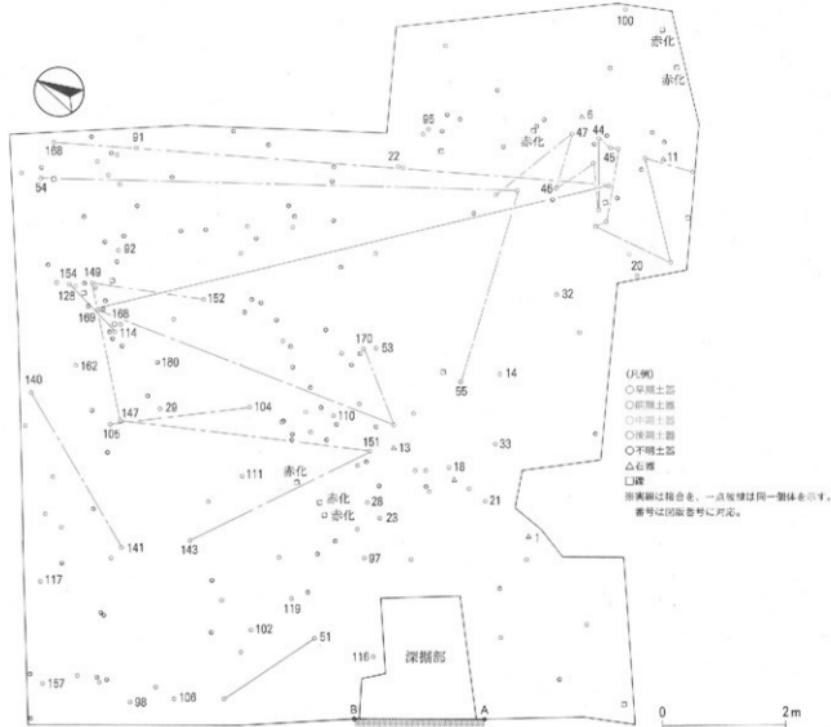
旧石器時代の概要

今回検出された旧石器時代に比定されると思われる石器は、すべて他時代遺構覆土等から検出されたもので、ローム層からプライマリーな状態で見つかったものではない。出土地点とそれとの出土点数を見てみると、a. 縄文時代調査区から縄文土器と混在して4点、b. 第2号土坑覆土から2点、c. 第3号住居覆土から5点及び第3号住居に近接した溝状遺構覆土から2点である。種別はすべて剥片である。検出された地点別に石材を見てみると

と、aでは頁岩・硬砂岩・泥岩、bでは頁岩・玉隨、cでは頁岩・凝灰岩・泥岩で構成されている。なお泥岩については珪質化したものである。

出土した石器

(第6・7図) 1はaから検出された縦打面を残す横長の剥片で頁岩製。2は第3号住居の第18図3の土器内部から検出された調整された打面を持つ縦長の剥片で、末端は折れている。頁岩製。3はcから検出された点状の打面を残す横長の剥片で、末端に微細な剥離が見られ、右側縁には折れが見られる。頁岩製。4はbから検出された平坦な打面を残す縦長の剥片で、末端が折れている。背面に縦面、節理面を残す。玉隨製。5はcから検出さ



れた平坦な打面を残す縦長の剝片で、背面打面寄りに階段状の剝離が見られる。凝灰岩製。6はaから検出された縦面の線状の打面を残す縦長の剝片で、末端に折り取りが見られる。硬砂岩製。7はcから検出された縦長の剝片でかなり風化している。打面は櫛打面と思われるが判然としない。左側縁に穂状の剝離が見られる。頁岩製。8はbから検出された縦長の剝片で打面は欠損している。風化している。頁岩製。9はcから検出された平坦な打面を残す剝片で、右側縁に微細な剝離が見られる。風化している。泥岩製。10はcから検出された平坦な打面を残す横長の剝片である。風化している。泥岩製。11はaから検出された縦長の剝片で、平坦な打面と思われるが判然としない。風化している。泥岩製。12はcから検出された剝片で、平坦な打面と思われるが判然としない。風化している。泥岩製。13はaから検出された剝片で、打面は不明、風化している。泥岩製。

同一母岩の判別は難しいが、肉眼観察では7と8の岩相、9～13の岩相は極めて近似している。

縄文時代の概要

本遺跡においては調査区のほぼ全域にわたって基本土層II層とした縄文時代の遺物包含層が見られた。そこで調査区南端台地平坦部の状態の良好な箇所を選定し約100m程の調査区(縄文時代調査区)を設けて調査を行った(第5図)。その結果、早期から後期の土器群を中心に遺物が検出され、早期の無文土器に比定される同一個体の破片がやや近接した形で検出されたが、他はいずれも小破片ばかりで平面的、層位的に有意な出土状況は見られなかった。各時期“混在”といった状況である。遺構は検出されていない。検出された遺物の内訳は縄文土器187点(早期37、前期34、中期3、後期35、不明78)、剝片5点(内4点は旧石器)、礫15点(内6点は赤化)である。

縄文土器はこの他に調査区から採集されたもの、遺構覆土から検出されたものもある。採集された縄文土器は455点(早期32、前期88、中期34、後期51、不明250)、竪穴状遺構からは52点(早期8、前期15、中期1、不明28)、第2号住居からは24点(早期4、前期2、中期1、後期7、不明10)、第3号住居からは12点(早期2、前期7、中期3)、第1号土坑からは11点(前期5、後期1、不明5)、第2号土坑からは14点(前期4、中期1、後期1、不明8)、溝状遺構からは70点(早期11、前期15、中期4、不明40)が出土している。

縄文時代調査区での傾向では中期を除く時期がほぼ均衡しているが、調査区からランダムに採集された資料では前期のものが多く、その傾向は各遺構にもやや当てはまるだろう。総じて中期が少ない傾向が伺える。

出土した縄文時代の遺物

ここに掲載したものは、縄文時代調査区からの出土資料、採集資料、明らかに他時代遺構と判明しているものでその覆土から出土した資料(第2・3号住居・溝状遺構)である。時代不明の遺構(竪穴状遺構・土坑)からの資料についてはそれぞれの遺構毎に掲載した。

早期の土器(第8・9図)

14～33は撚糸文系の土器である。14～18は口縁部が肥厚・外傾し、口唇上に縄文が施されている。14～16は口縁直下に斜位回転の縄文が見られる。19～28、32、33は脇部破片で、いずれも条が縦位になるように縄文が斜位方向に施文されている。29～31には撚糸文が見られ、29・31は撚糸R、30は不明。14～28、32、33は井草式に比定され、いずれも胎土が粗い。29～31は稻荷台式に比定される。

34～43は沈線文系の土器である。34は口縁上に半截竹管による刺突、沈線による刻みが見られ、口縁直下には横位沈線施文後、斜位沈線、半截竹管による刺突が施文されている。35は口縁直下に斜位沈線、平行沈線、半截竹管による刺突が見られる。36は口縁直下に横位沈線、貝殻腹縁文が施文されている。37は竹管による刺突が見られ、38～43は横位あるいは斜位の沈線が施されている。

44～59は無文の土器である。44～47は同一個体で、口縁は外削状になる。外面は横位の削りによる胎土粒子の移動痕跡が顕著である。48～50、52は横位削り、51はヨコナデが見られる。53は口縁直下にナデによる太沈線、脇部には斜位の削り痕が見られる。54～56には横位削りの後、ヨコナデがされている。57～59はヨコナデが顕著なもので、ナデがあたかも幅広の沈線のように見える。この無文土器の一群にはほとんどの破片で擬口縁が観察される。

前期の土器(第10図～第12図120)

第10図の土器は胎土に纖維を含む一群である。60～64は原体の側面圧痕が見られる一群で、60のみ0段rによる単軸絡条体第5類による施文の可能性が考えられる。

65～68は櫛齒状施文具による波状沈線が見られる一群で、68では一部斜交している。69～73は沈線あるいは半截竹管による平行沈線が施された一群で、71は地文に2段RLが、73は平行沈線内に半截竹管による刺突が見られる。74～76は貝殻腹縁文が施された一群である。77～86は繩文の施文された一群で、77は口唇上に原体による刻み、口縁直下には1段RLの側面圧痕、以下には2段LRの結節が見られる。78は半截竹管による結節状沈線と附加条1種（2段LR）附加1条（0段r）が観察される。79は2段LRの結節、80は2段LRの羽状繩文が見られる。

87～95は浮島・興津式に比定される波状貝殻文を持つ一群である。施文具は87～89がサルボウ系の、90～95がハマグリ系の貝殻を使用している。87、92は口唇上に指頭状圧痕が見られる。96～102は腹縁部の一部を欠いた貝殻を使った波状貝殻文で、いわゆる三角文に近いものもみられる。96は波状口縁であろうか。103～107は興津式に比定される沈線区画内に貝殻腹縁文が見られる一群である。103は貝殻腹縁文の施文後沈線区画を行い、無文区画内を磨り消している様子が観察された。108、109は半截竹管による刺突が施された土器で、108は口唇上に指頭状圧痕が見られる。110～115は平行沈線が施された一群で、110は口縁直下の垂下する集合沈線施文後平行沈線が施文されている。116は櫛齒状施文具による条線を有する土器。117は外面に綴ナデの痕跡が顕著な無文の土器。118は折り返し口縁で、口唇上に脂頭状圧痕が見られる。119は折り返し口縁で、口唇上に原体による刻みを有し、口縁直下に2段RLの側面圧痕が施される。120は十三菩提式に比定される土器で、結節浮線文、浮線文が見られる。

中期の土器（第12図121～135）

中期前葉から中葉に比定される一群である。121は口縁直下に3条の横位結節沈線文を施し、地文は2段RLである。122は地文2段RL施文後結節沈線を施す。123は結節沈線文を有する土器。124は波状口縁を呈し、口唇上に刻みを持つ。地文、隆帶上に2段RL、隆帶に沿って結節沈線文が施される。125は櫛齒状沈線、2段RL施文後ボタン状貼付が見られる。126は地文、隆帶上に2段RL、127は地文、隆帶上に2段LRを施し、結節が見られる。128～135は阿玉台式に比定される土器である。128は口縁直下に結節沈線文による区画が見られる。129は把手に沿って、130、133は断面三角の微隆帯に沿って結節沈線文が施される。131は結節沈線、ヒダ状痕、134に

もヒダ状痕が見られる。132は結節沈線、135は断面三角の微隆帯が施される。

後期の土器（第13・14図）

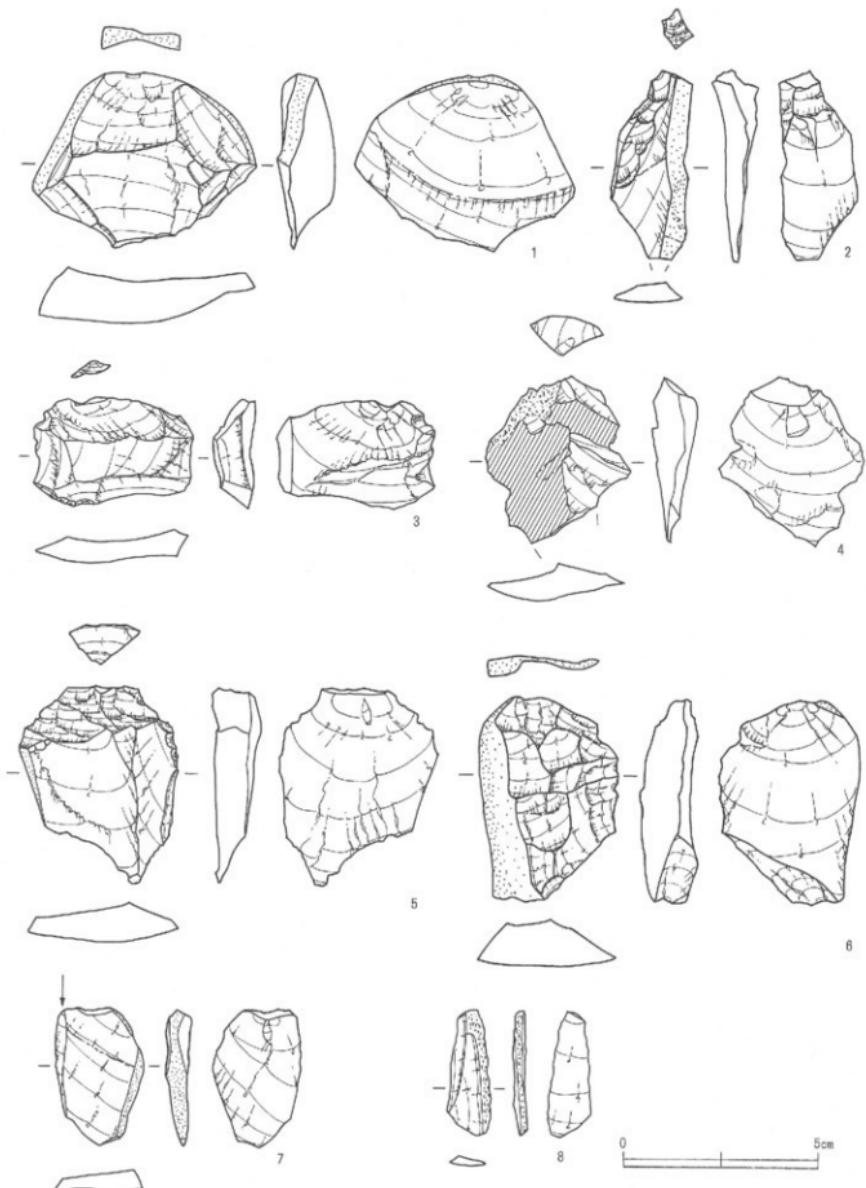
136～142は称名寺式に比定される土器である。136、137地文繩文施文後沈線区画し、138～141では沈線区画内に刺突が施されている。142は刺突ではなく短沈線のようである。143～152は同一個体で、口縁直下に無文帯を有し、隆帶下部に櫛齒状施文具による曲線を基調とした柔線を施す。153は櫛齒状施文具による直線を基調とした柔線が見られる。154～156は沈線区画内に柔線の施された土器である。157は斜交する沈線が施される。158は口縁直下に円形の削り取り痕、円形区画を描く沈線が見られる。159は口唇上に刺突が施され、口縁直下に曲線を基調とする沈線が見られる。160は斜交する沈線、161は綴位沈線が見られる。162～165は繩文施文後沈線が施文されている。166～170は繩文のみの上器で、それぞれ2段RLである。171は「6」の字状隆帯を有し、刺突が施されている。

その他の土器（第15図172～193）

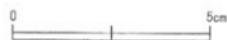
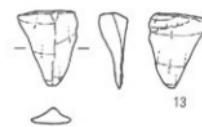
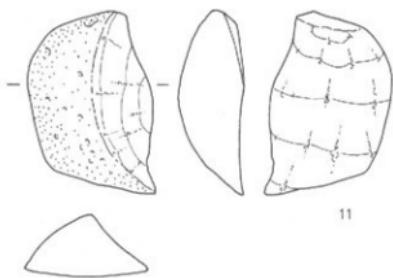
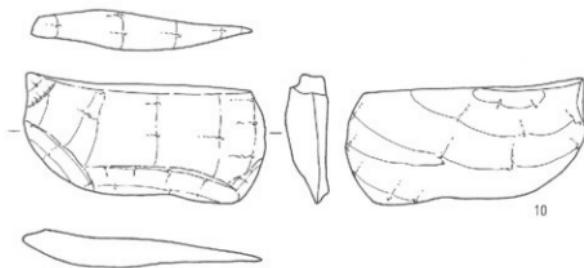
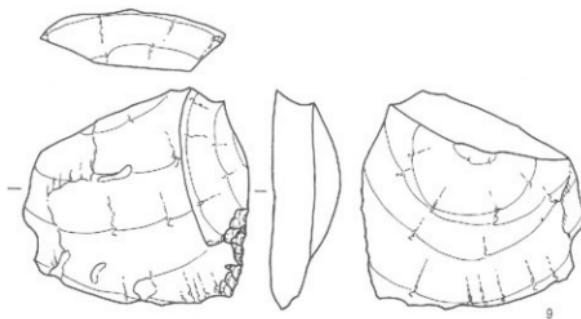
所属時期不明土器を一括した。172、173は同一個体で、繩文原体は判然としないが、附加条1種（2段RL）附加1条？（1段R）ではないかと思われる。ただし結節には2条表れている。174は1段Lの結節、175は1段Rの結節、176は2段LRの結節、177は1段Lの結節、178、179は2段LRの結節、180は1段Lの結節、181は2段LRの結節、182、183は1段Lの結節、184、185は同一個体で2段LRの施文後2段LRの側面圧痕、186、187は同一個体で口唇上に刻みを有し1段L、188は口唇上に原体による圧痕を有し、浅い太沈線施文後1段L、189は2段RL、190は2段LR、191は1段Lがそれぞれ施文されている。192は条痕文が見られる。193は底部破片で割がやや張り、上げ底気味である。

その他の遺物（第15図194、195）

194は十製耳飾と思われる破片である。195は石英粗面岩製のスタンプ形石器である。圓面化はしていないが、繩文の石器と思われるものはこの他に黒曜石の剝片4点、玉隨の剝片2点が調査区から採集されている。



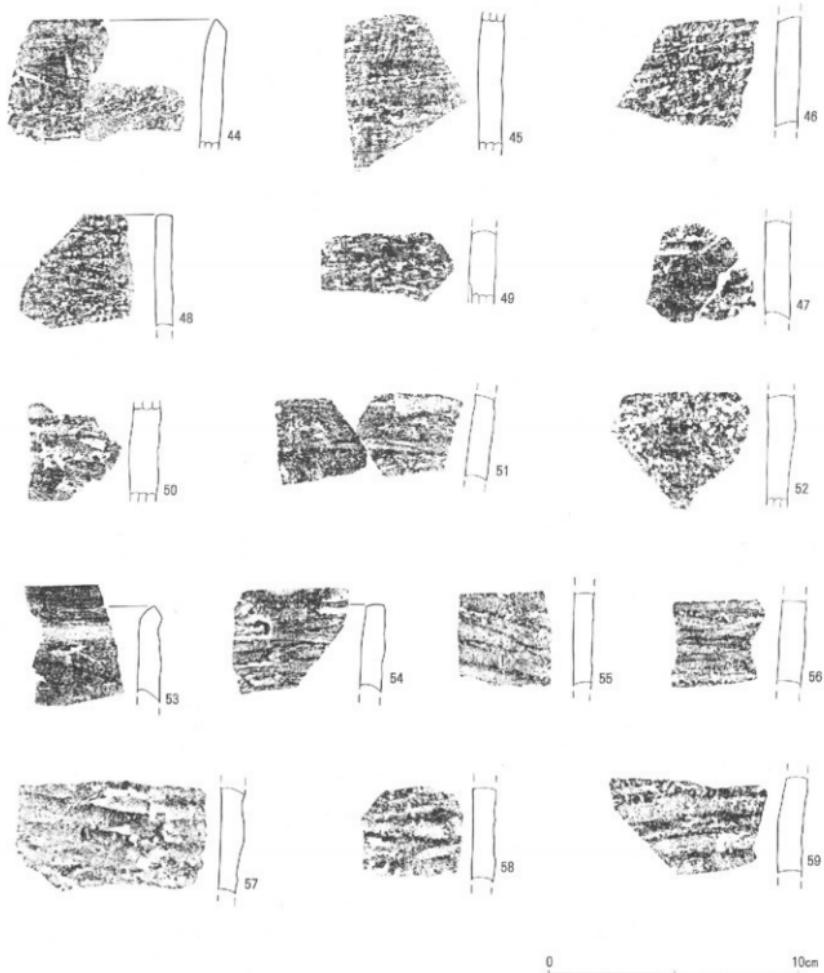
第6図 石器①



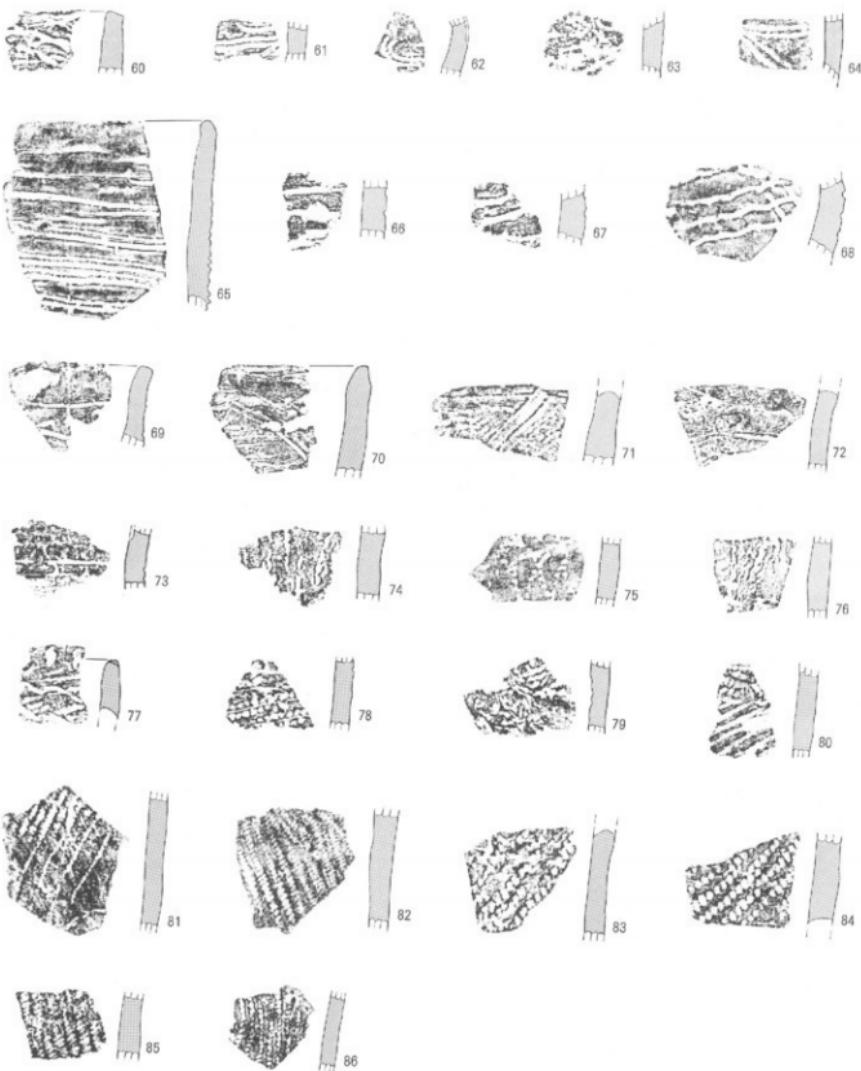
第7図 石器②



第8図 桶文土器①

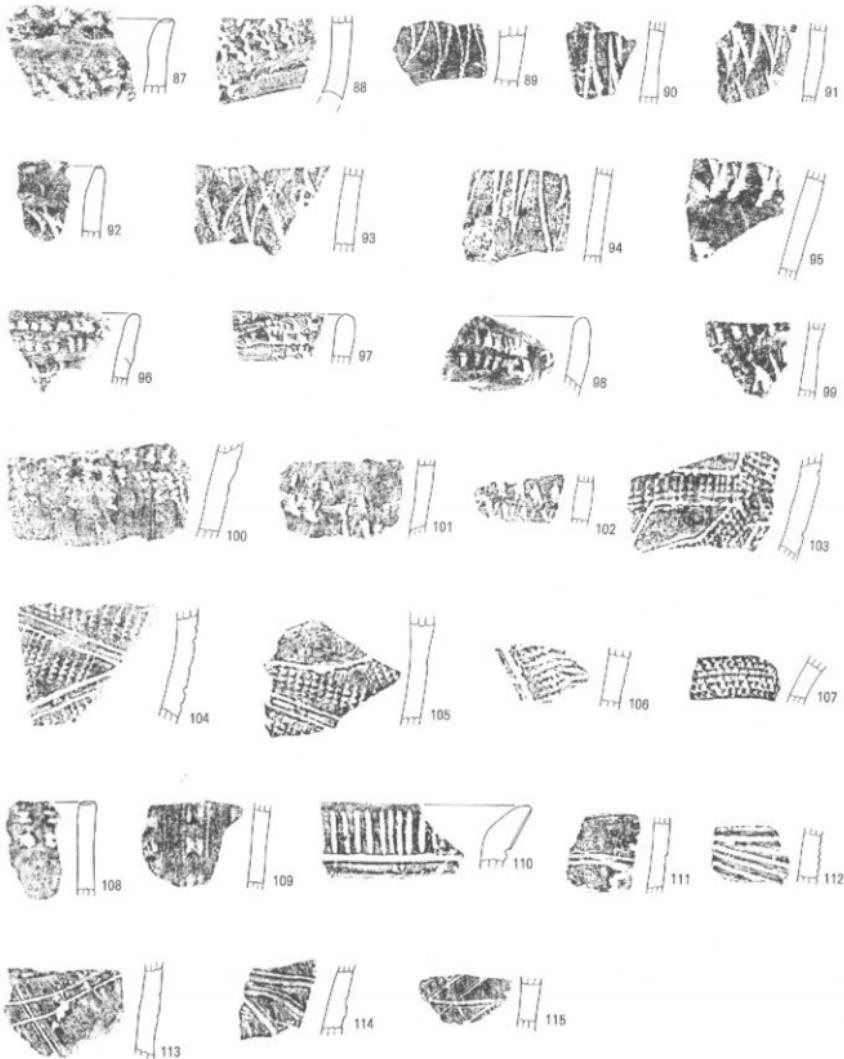


第9図 繩文土器②



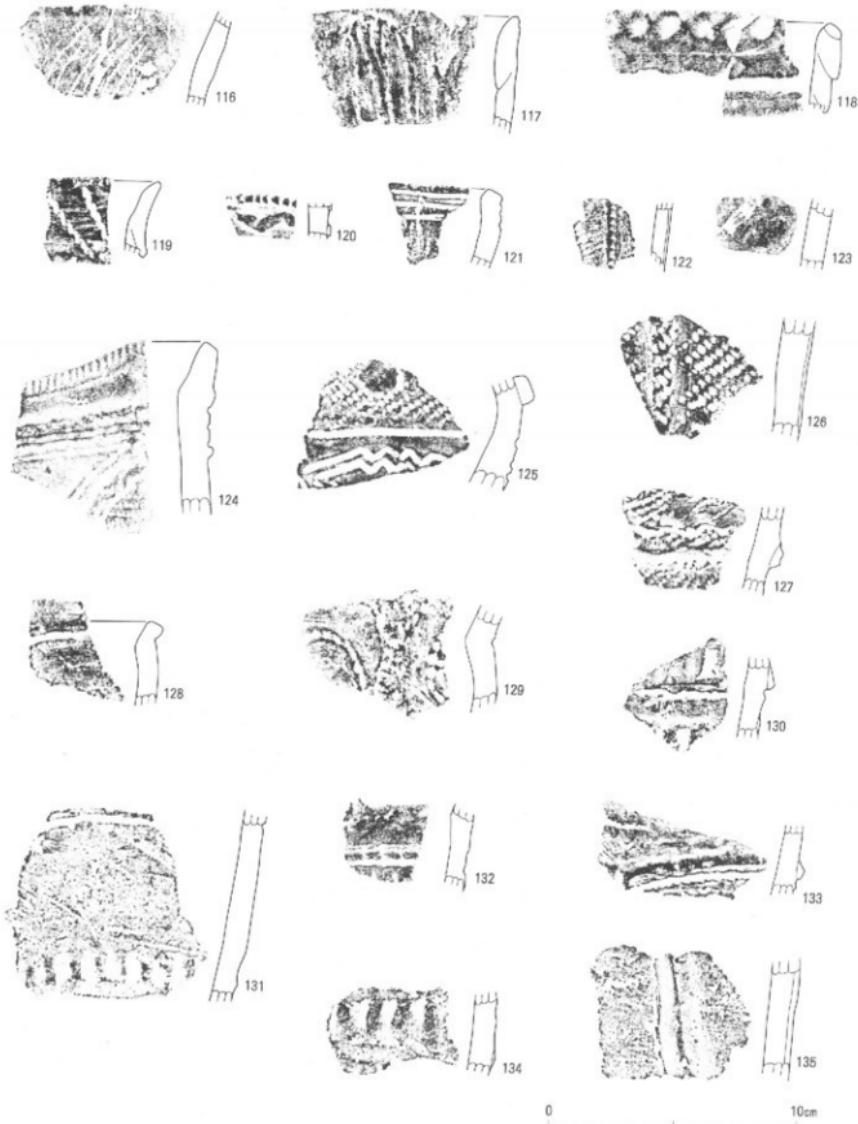
0 10cm

第10図 縄文土器③

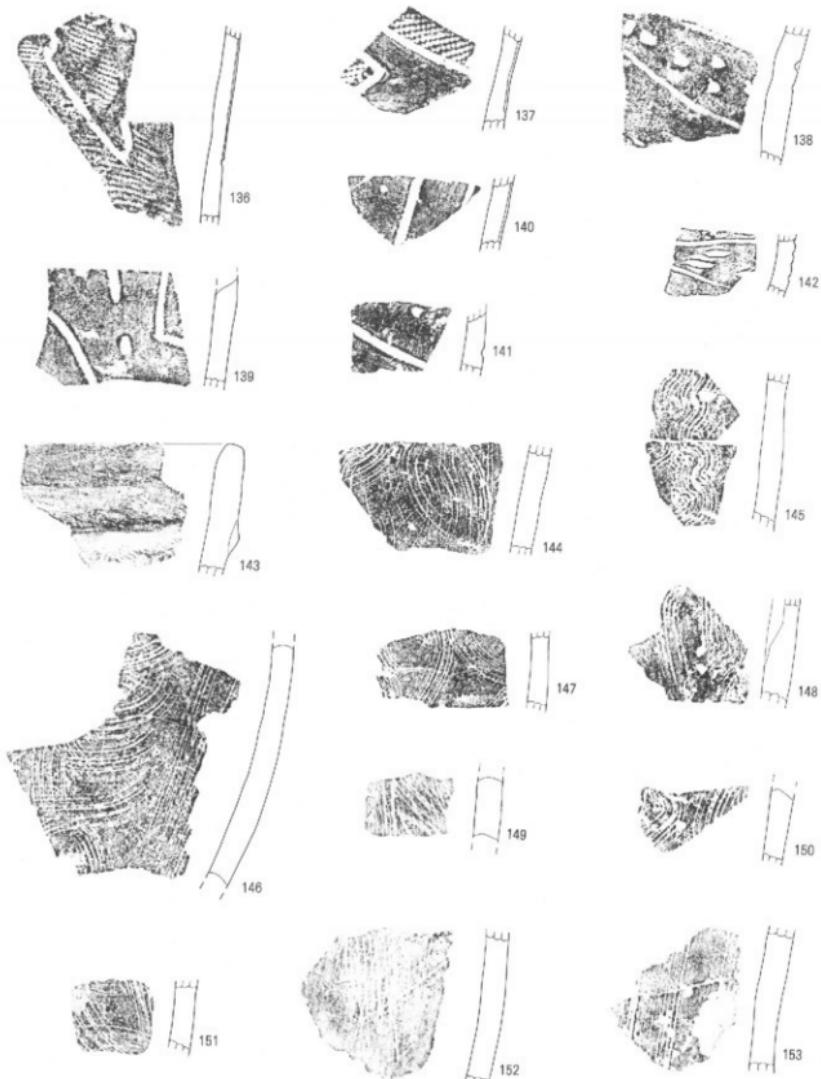


0 10cm

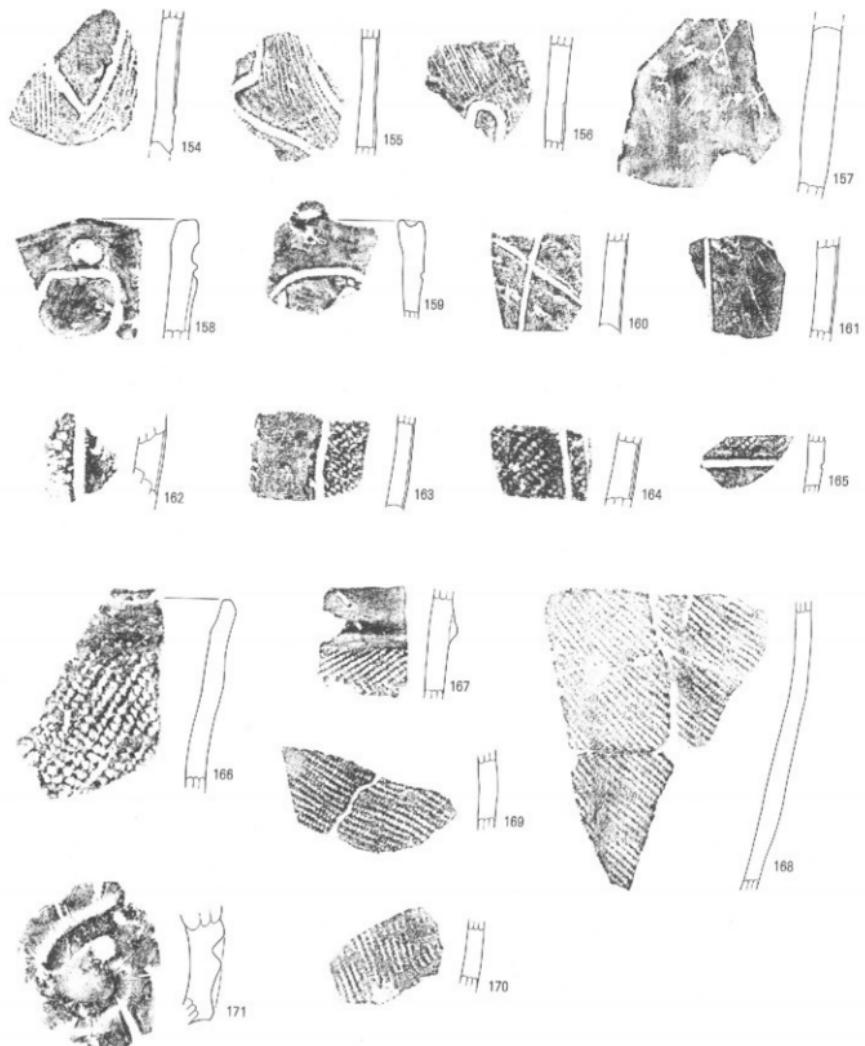
第11図 縄文土器④



第12図 縄文土器⑤

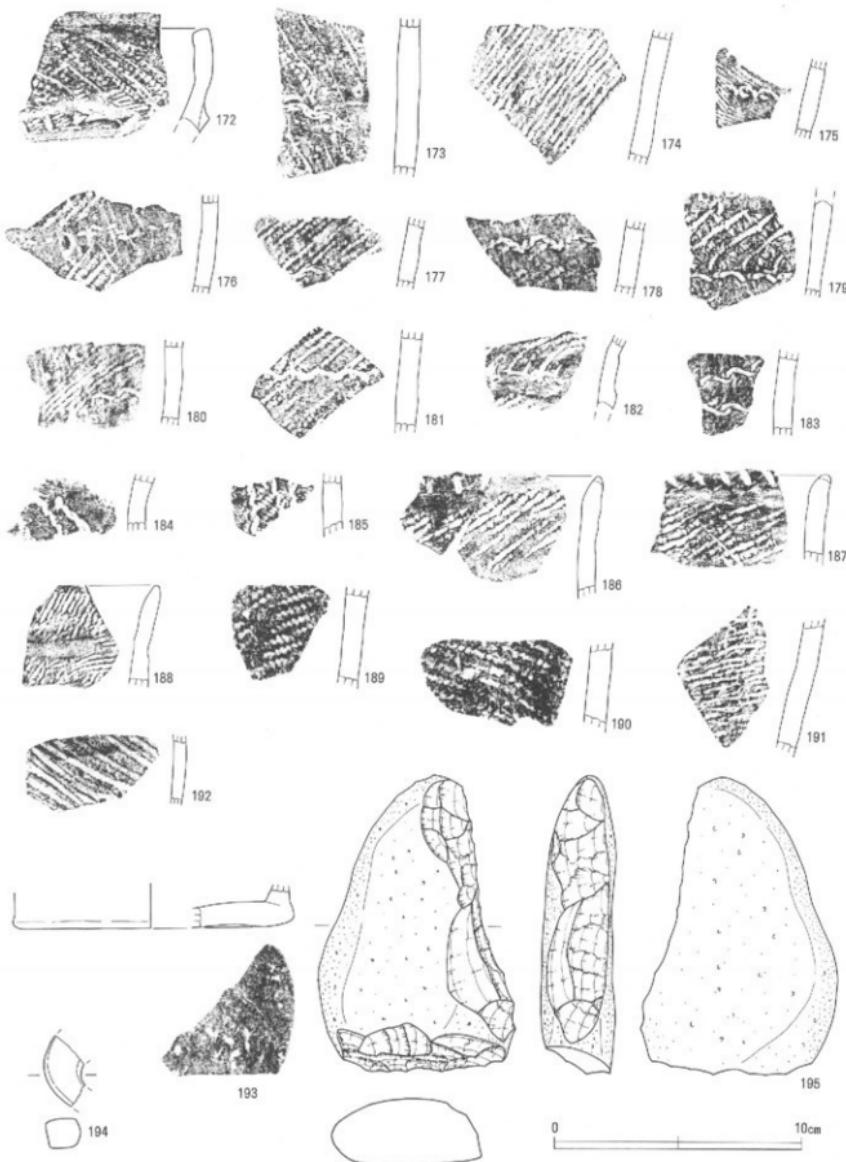


第13図 縄文土器⑥



0 10cm

第14図 桶文土器⑦



第15図 繩文土器⑥・土製品・石器

2 古墳時代の遺構と遺物

第3号住居址

位置 調査区東側の標高27m付近の台地緩斜面から検出された。住居中心は北西—南東方向に溝状遺構により一部床面まで切られている。

規模と形態 平面形は不整形形を呈し、規模は南西—北東方向の壁間で最大5.4m、北西—南東方向で最大4.8mである。住居の床、壁は地山ローム層からなり、壁は住居西コーナー付近が最も残りが良く、高さは54cmを測る。付属施設として方形に配される主柱穴と思われるピットが4基(1P～4P)、南西中央壁際から楕円形プランのピット1基(5P)、南コーナー付近から貯蔵穴1基がそれぞれ検出されている。1P～4Pは底の地山ロームが僅10cm程灰白色に変色、硬化していた。また、1P、3Pは住居中心に向かってやや内転び気味に傾斜している。本住居址は住居壁際が中心部よりやや高くなるいわゆるベット状の床を成している。その比高は10cm程で、柱穴截ち割時の観察では貼り床の様子は伺えず、当初からベット状に構築されたものと考える。なお1P周辺の床は調査時に掘りすぎている。ベット状の範囲は溝状遺構の搅乱や掘りすぎにより正確には捉えきれないが、土層観察用珪や遺物下に残された床面レベルのデータ等から南西壁の一部を除いて全周していることが認められ、床の低い範囲は溝状遺構内から南西壁の間に収まると考えられる。その他、床面硬化部、壁溝、炉址は検出されていない。

覆土と遺物の出土状況 住居覆土と溝状遺構覆土は層相が近似し、断面にてようやく分層できる程度で平面的に分層することは困難であった。したがって住居覆土を掘り下げに際しては溝状遺構覆土も一緒に掘り下げている。

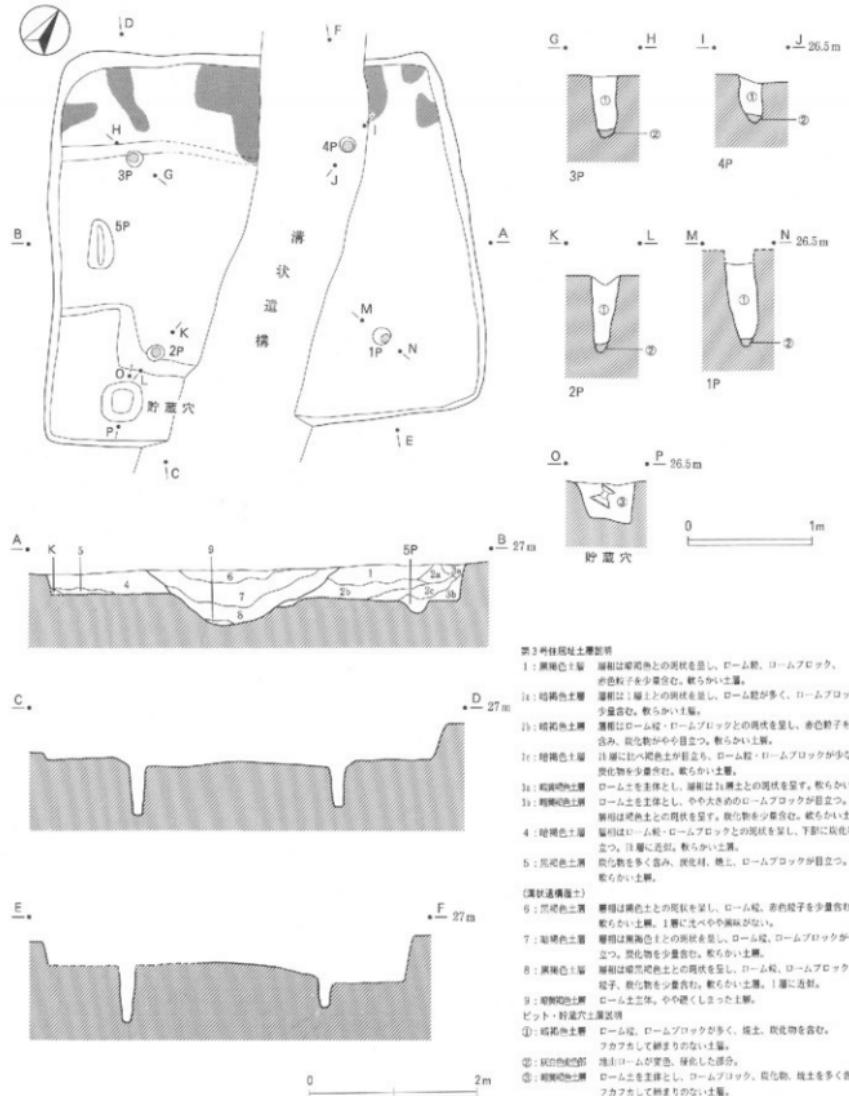
床面上には壁際を中心に炭化材を含む焼土が認められ、特に北西壁際で著しい。住居覆土全体では自然堆積の様相を示し、壁際の3層とした上層はローム主体の上層でロームブロックも見立ち、壁の崩落に因るる土層と考えられる。他の土層では床面に近い部分で炭化物、焼土が目立つ。

主柱穴とした1P～4P覆土は単層で、いずれもローム粒、炭化物、焼土を含み、フカフカして締まりのない土層である。ちなみに截ち割り時の観察では掘方全体がフカフカしており、柱痕は認められなかった。貯蔵穴はローム土を主体に炭化物、焼土を含み、やはり締まりに欠ける土層で、覆土中から12の高环形土器が倒れ込むよ

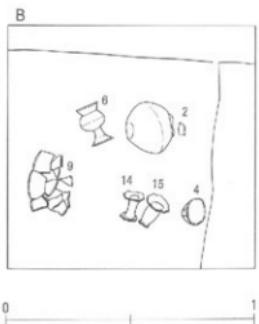
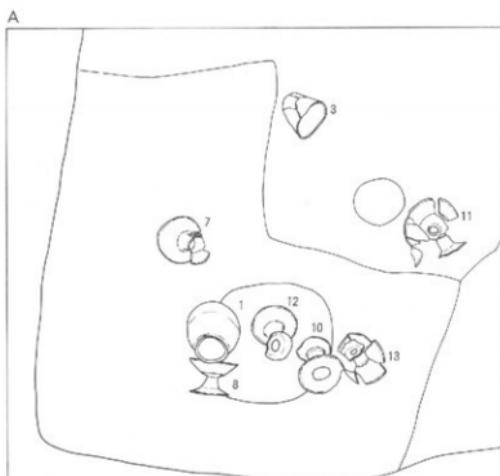
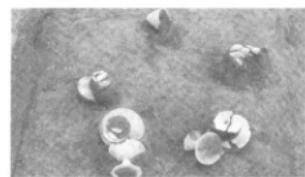
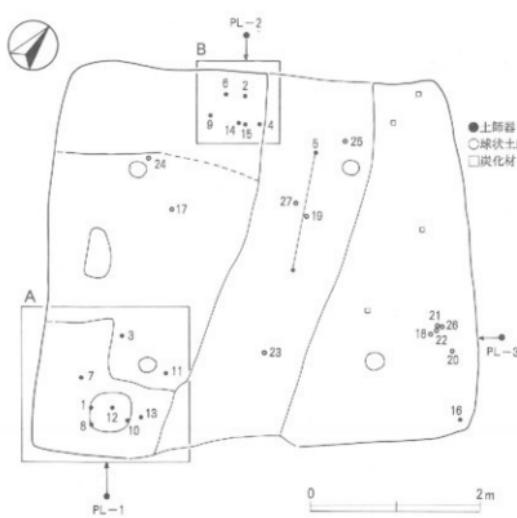
うな形で検出されている。

本件居址から検出された遺物は、完形もしくはほぼ完形で検出された土師器13点、上師器片76点、球状土錘12点、碟6点、縄文土器12点、旧石器時代に比定される石器5点である。また1の内部より滑石チップが検出されている。上師器片は小破片が多く、ほとんどが覆土中からのものである(溝状遺構覆土のものも含む)。土師器の完形品は住居南コーナー付近の床上もしくは貯蔵穴上から一括して出土したものと(1,3,7,8,10,11,12《貯蔵穴覆土中》,13)、北西壁際の床上から一括して出土したもの(2,4,6,9)がある。5は溝状遺構覆土中からのものである。球状土錘は18、20、21、22、26が住居東側床面もしくは床面から薄い間層を挟んでまとめて検出されている。17、24は住居西側床面付近から、19、23、25、27は溝状遺構覆土から検出されたものである。

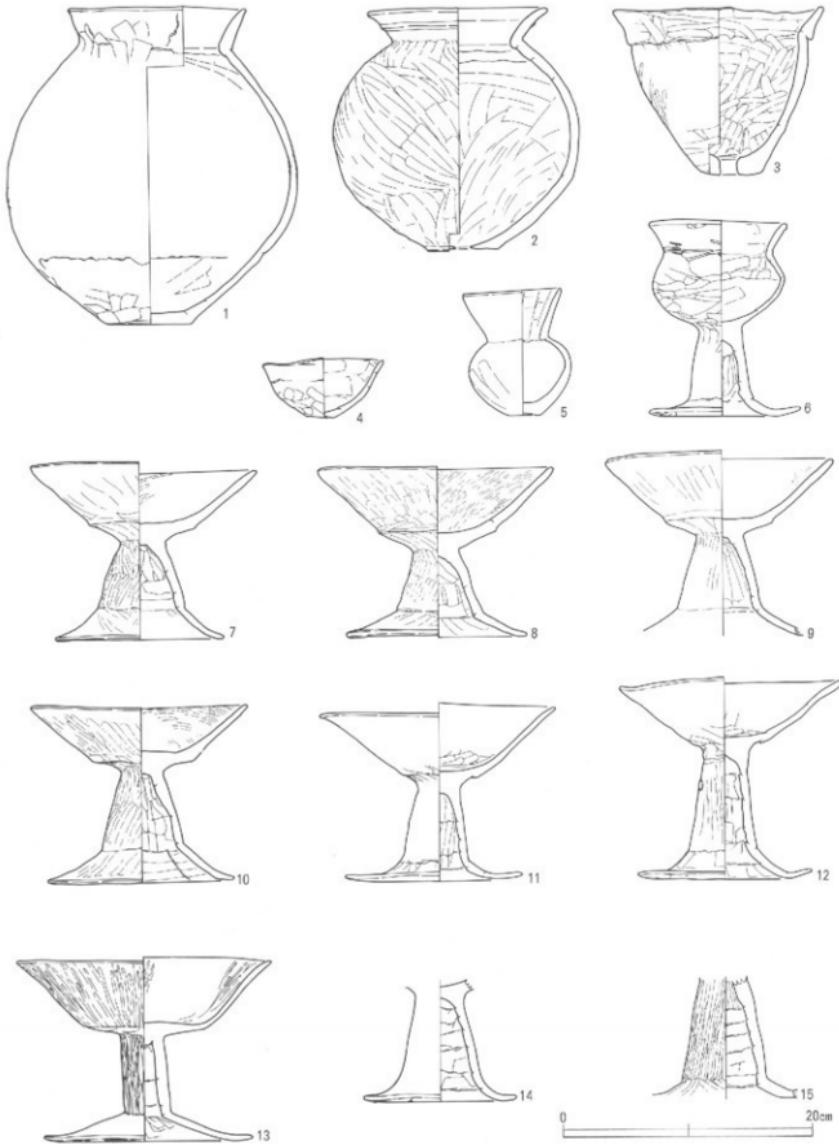
出土遺物(第18・19図) 1～16は土師器。1は壺形土器で下部に顕著な接合痕を残す。内部充填土より滑石チップが検出されている。2は壺形土器で底部に焼成後に開けられた穿孔が見られる。内部充填土より炭化材。3は瓶で内部充填土より第6回2の石器が検出されている。4は鉢形土器である。5は壺形土器で外面に布引状の痕跡が観察される。6は脚付小形壺で内部充填土より炭化材。7～13は高环形土器である。9、12の环部内部充填土より炭化材。14、15は高环脚部で、16は高环結合部である。17～28は球状土錘である。19の孔内からは炭化物が検出されている。22の孔内より焼土。



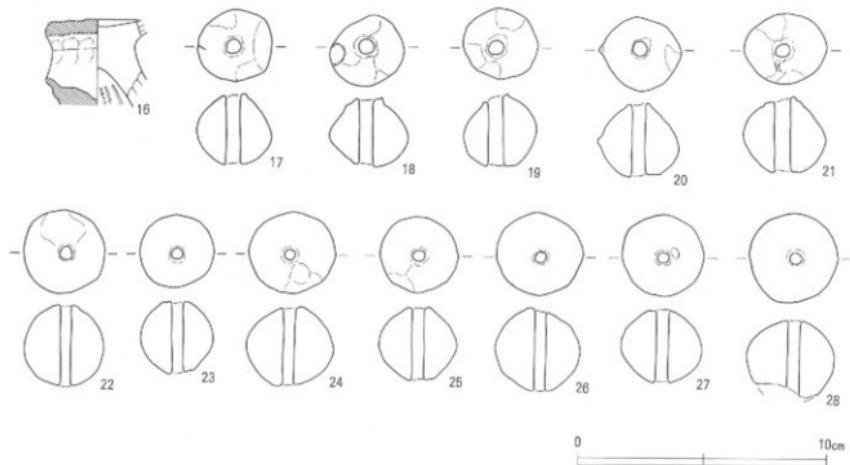
第16図 第3号住居址



第17図 第3号住居址遺物出土状況



第18図 第3号住居址出土遺物①



第19図 第3号住居址出土遺物②

3 平安時代の遺構と遺物

第2号住居址

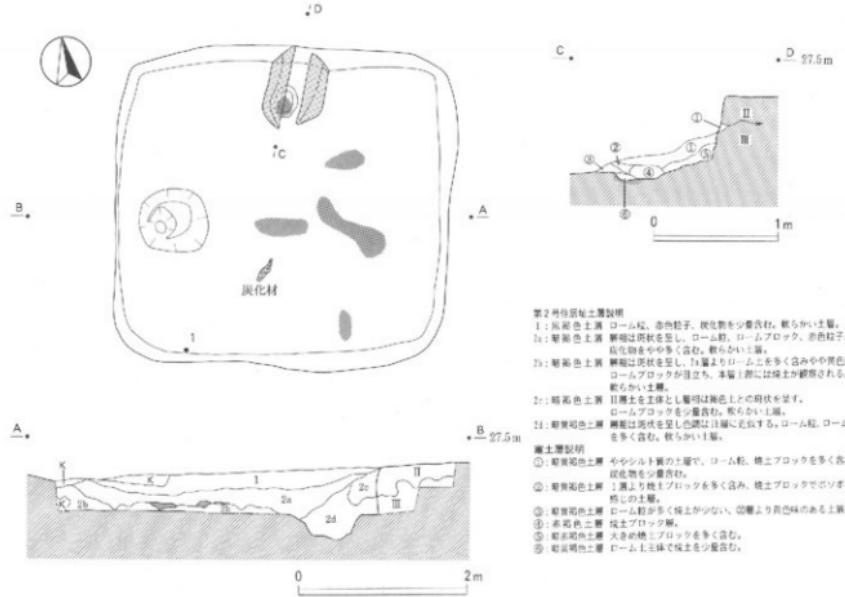
位置 調査区南東の標高27m付近の台地平坦部から検出された。

規模と形態 平面形は4m四方の方形を呈する。基本土層II・III層を壁とし、III層を床とする。壁の高さは平均で50cmを測る。付属施設として北壁のほぼ中央に竈がつくられ、西壁際にピットが1基検出されている。柱穴、壁溝は検出されておらず、床面硬化部も特に認められない。竈はローム土を主体に粘土、砂を混ぜた土でつくられている。燃焼部はやや浅い掘り込みを持ち、ほんのり赤化している。特に硬化はしていない。

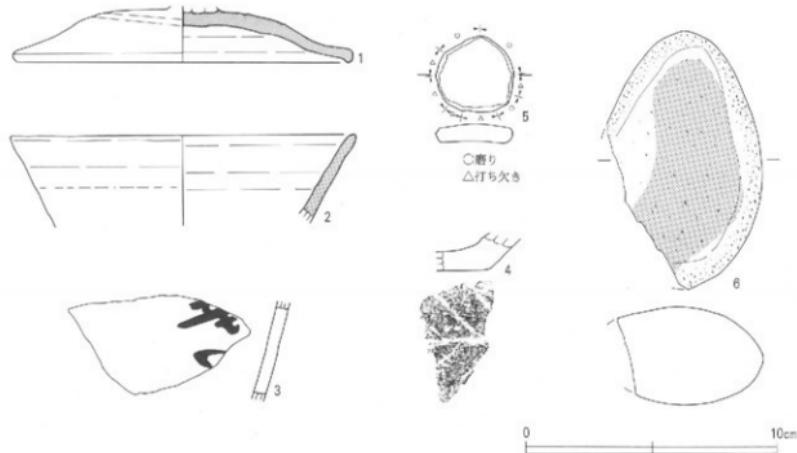
覆土と遺物の出土状況 覆土は自然堆積の様相を示し、床に接する覆土中には焼土、炭化材が認められる。検出された遺物は極めて少なく、土師器片47点、須恵器2

点、土製円盤1点、磨石1点、縄文土器24点である。1は住居南西コーナー付近の床上から壁に寄りかかるように検出されている。2は北東床上から、3、5は北東の覆土2層中から、4は竈内から、6は南西床上からそれぞれ検出されている。

出土遺物（第21図） 1は須恵器環蓋である。2は須恵器環で内面に漆状の付着物が認められたが、調査中に付着物は失われた。3は土師器甕と思われる破片で墨書きが認められる。この他にもう一点同一個体で墨痕の認められる小破片が検出されている。4は土師器甕の底部破片で木葉痕が認められる。5は土師器片を利用した土製円盤で周縁を打欠きもしくは磨って整形している。6は硬砂岩製の磨石で磨滅痕が認められる。



第20図 第2号住居址



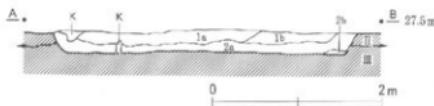
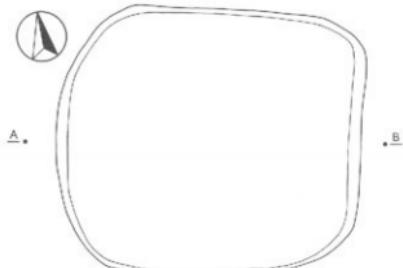
第21図 第2号住居址出土遺物

4 その他の遺構と遺物

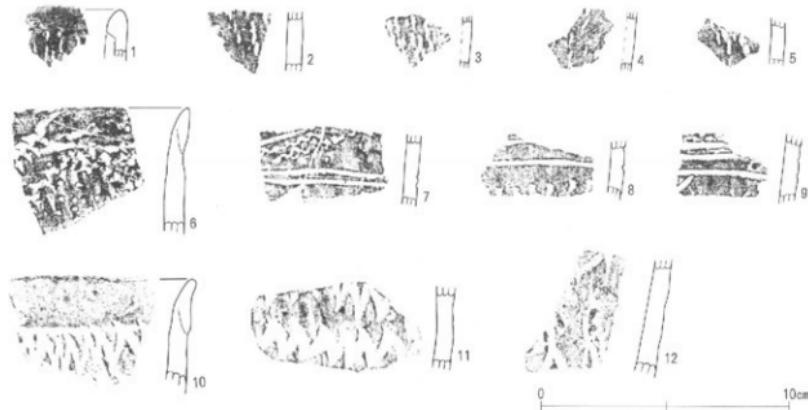
竪穴状遺構

位置 調査区南側の標高27m付近の台地平坦部から検出された。

規模と形態 平面形は3.6m×3.3m程の隅丸方形を呈する。基本上層II・III層を壁とし、III層を底とする。壁の高さは平均で30cmを測る。付属施設は一切認められない。



第22図 竪穴状遺構



第23図 竪穴状遺構及び周辺出土遺物①

覆土と遺物の出土状態 覆土は自然堆積の様相を示す。本遺構から検出された遺物は土師器片3点、縄文土器52点である。遺構の時代を特定できるような出土状態は認められなかった。

出土遺物 (第23・24図) 掘載した遺物の中には遺構プラン把握のために延長あるいは追加設定した遺構範囲外のサブトレチ出土の遺物も含まれる。それらは全て縄文時代の遺物で、本来は包含層(II層)出土のものである(それぞれの出土位置については付表参照)。

1~5は早期撫系文系土器で1~4は同一個体。7~9は早期沈線文系土器。6、10~12は前期の波状貝殻文を有する土器。13、14は前期の沈線区画内に貝殻腹縁文を有する土器。15~20は同一個体で2段LRLの結節が施文されている土器。21は外側が2段LRL、内側に2段LRLの側面圧痕が認められる土器。22は2段SLR、23は地文が2段RLで結節浮線文、24は結節浮線文、浮線文が施されている土器。25は側縁に磨滅痕が認められる硬砂岩製の打製石器。

竪穴状遺構土層説明

- 1a: 黒褐色土層 ローム粘土を少量含み、1層とは差別的。軟らかい土質。
- 1b: 暗黃褐色土層 ローム粘土を多く含み、1層とは差別的。堅らかい土質。
- 2a: 暗黃褐色土層 基礎1層 地盤と同状況を呈し、ローム粘土、ロームブロックが多くねじれやすい土質。
- 2b: 暗黃褐色土層 基礎土層



第 24 図 積穴状造構及び周辺出土遺物②

第1号土坑

位置 調査区中央からやや南寄りの標高27m付近の台地平坦部から検出された。

規模と形態 平面形は径約3m程の不整円形を呈する。II・III層を壁、III層を底とする。壁の高さは平均で40cmを測る。北壁際付近に燃焼部と炭化物が底に付着した範囲が認められる。燃焼部は赤化しロームがボロボロになっている。底全体が燃焼部を中心にやや硬化している。

覆土と遺物の出土状態 覆土は自然堆積の様相を示す。本土坑から検出された遺物は縄文土器11点、鍬2点で、すべて覆土中からのものである。土坑の時代を特定できるような出土状態は認められなかった。

出土遺物(第27図) 1～4は胎土に纖維を含む土器で、1は2段RLの羽状繩文、2～4は半截竹管による平行沈線文が施される。5は櫛歯状施文具による条線文。

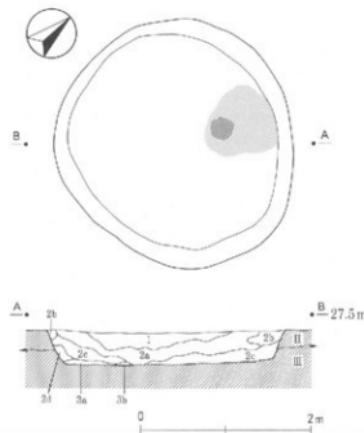
第2号土坑

位置 調査区中央からやや東寄りの標高27m付近の台地平坦部から検出された。

規模と形態 平面形は径約3m程の不整円形を呈する。ローム層を壁、底とする。壁の高さは平均で50cmを測る。北壁際付近に燃焼部が認められる。燃焼部は赤化しロームがボロボロになっている。

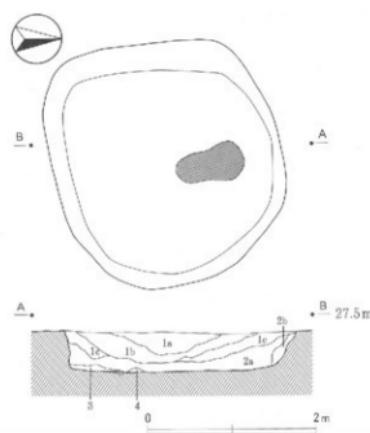
覆土と遺物の出土状態 覆土は自然堆積の様相を示す。本土坑から検出された遺物は縄文土器14点、旧石器時代に比定される石器2点で、すべて覆土中からのものである。土坑の時代を特定できるような出土状態は認められなかった。

出土遺物(第28図) 1は胎土に纖維を含み2段RLの結節、2は原体不明の結節、3は2段LR、4は中期阿玉台式、5は櫛歯状施文具による条線文。



第1号土坑土層説明

- 1：黒褐色土層
2：暗褐色土層
3：褐色褐色土層
4：褐色褐色土層
5：褐色褐色土層
6：褐色褐色土層
7：褐色褐色土層
8：褐色褐色土層
9：黒褐色土層
10：暗褐色土層

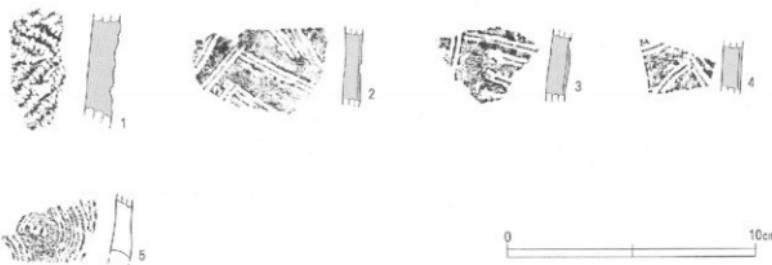


第2号土坑土層説明

- 1：黒褐色土層
2：黒褐色土層
3：褐色褐色土層
4：褐色褐色土層
5：褐色褐色土層
6：褐色褐色土層
7：褐色褐色土層
8：褐色褐色土層
9：褐色褐色土層
10：褐色褐色土層

第25図 第1号土坑

第26図 第2号土坑



第27図 第1号土坑出土遺物



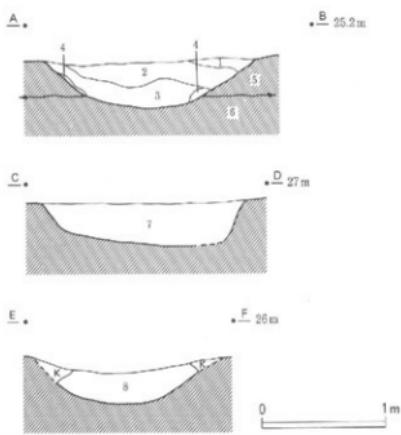
第28図 第2号土坑出土遺物

溝状遺構

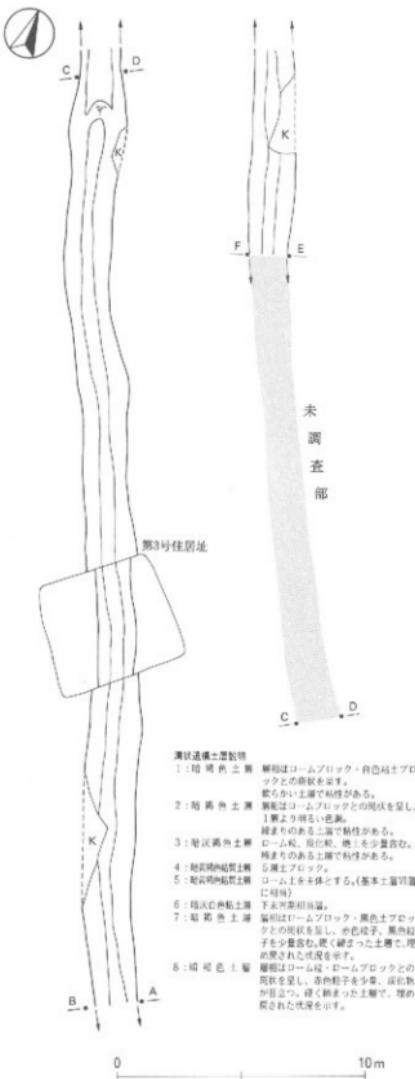
位置 調査区北東側で台地を横断する形で検出された。

規模と形態 検出された総延長は約67mで、途中19m程の未調査部を残す。平均的な幅は2m程で、深さは最大で約60cm（第3号住居址付近）、最小で約40cm（溝両端、中央部付近）である。断面形は場所によって若干異なるがながらかな皿状を呈する。溝中央部付近で底に20cm程の段が付いている場所が見られる。台地平坦部にかかる部分についてはローム層を掘り込んで作られているが、標高25m付近の溝南東部では粘土層が底になっている。

覆土と遺物の出土状態 覆土の層相も地点によって異なるが、第3号住居址から台地斜面にかかる範囲については自然堆積の層相を示し、台地平坦部では人为的に埋め戻したような層相が観察される。本溝から検出された遺物は土器片100点、須恵器片1点、赤化磧4点、縄文土器70点、旧石器時代に比定される石器2点である（第3号住居址にかかる部分のものは含まず）。すべて覆土中からのもので、溝の時代を特定できるような出土状態は認められなかった。



第29図 溝状遺構



炭窯状遺構

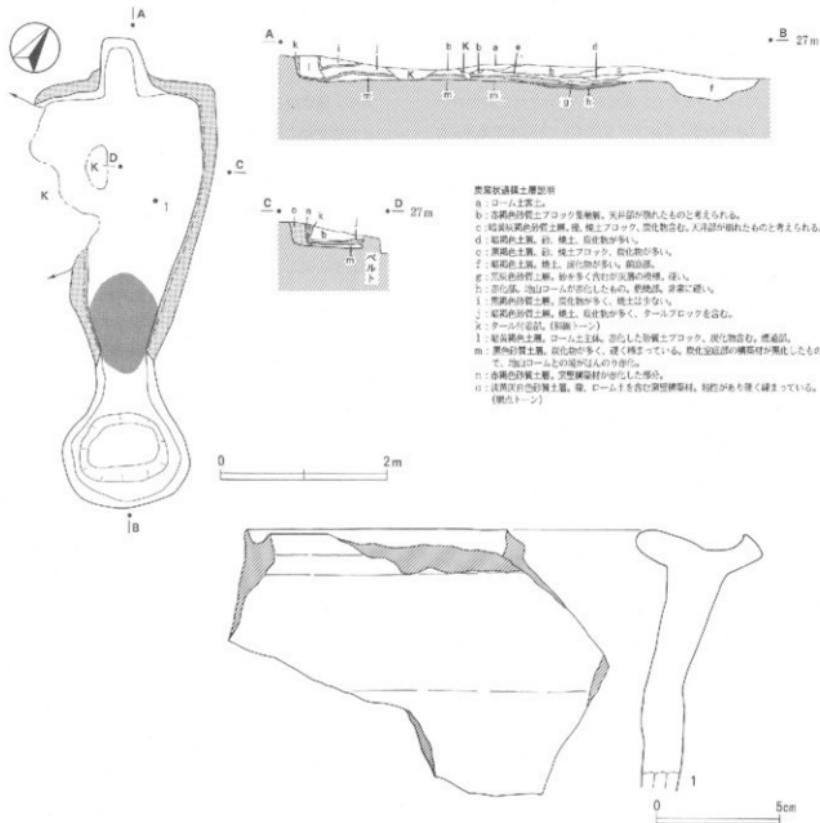
位置 調査区北東端の標高27m付近の台地緩斜面部から検出された。

規模と形態 一部擾乱を受けているが、長軸約5.8m、炭化室最大幅約2.3m、焚口閉塞部幅約0.75m、前庭部最大幅約1.6mを測る。ローム層を掘り込んでつくられており、確認された深さは25cm程度、半地下式の構造になると推測される。焚口部には地山ロームが真赤に焼け込んだ跡が見られ、非常に硬くなっている。煙道部は奥壁中央

に位置し、ほぼ垂直に立ち上がる。煙道部壁には真黒なタールが付着している。炭化室は底から側壁は粘土土を主体とする砂まじりの土でつくられ、天井部も同様と考えられる。

覆土と遺物の出土状態 覆土は窯体が崩れて埋積した状況を示し、焚口部より煙道部にかけて厚くタールが付着している。検出された遺物は1点で1が炭化室部分で出土している。

出土遺物 1は外面に鉄輪のかかった大甕の口縁部破片で、推定口径は約40cm。



第30図 炭窯状遺構及び出土遺物

IV まとめ

今回の発掘調査では当初、その地形、立地などからかなり規模の大きい集落址を想定していた。ところがその予想を違え、前記した遺構、遺物の検出に止まった。しかしながらこうした遺跡の評価も、過去の多様な人間活動を復元する上で欠くことのできない資料となり得ることは言をまたない。そうした“資料”となり得るレベルまで本報告は昇華されていないが、まとめてあたり、発掘調査から整理作業の過程で得た所見を中心に本報告の補足も含めてここに記す。

まず古墳時代中期に比定される第3号住居址だが、検出された主柱穴の底には径10cm程の硬化した変色部分が認められると本文にも記したが、これは恐らく柱が接していた跡で、径10cm程の材が柱として使用されていたことを示しているのだろう。床面から検出された炭化材の樹種同定(付編参照)ではクヌギ節という結果である。ところで、ここからはかなり予断も含まれるが、その柱穴であるが、截ち割り断面上層観察の所見では柱がそのまま残されて遺棄されたという状況は示していない。開口部を含めて掘方全体がガフカ力して綺麗のない上層であり、焼土、炭化物が含まれている。木住居址は状況から判断して焼失家屋であることは間違いないと思われるが、この焼土、炭化物は焼失前に由来するものであろう。積極的な証拠は示せないが、恐らく柱は焼失前に故意に抜かれ、片付けられた後、家庭に対する燃焼行為が行われ、柱穴の空間に固められることのない土と一緒に焼土、炭化物が混入したのだろう。この燃焼行為に関連して、遺物の出土状況もまた暗示的である。使用に耐えうる完形土器が住居床面の2箇所から一括して検出されている。この遺棄・廃棄的な行為の裏に木住居址の履歴を明らかにする一つの手がかりがあるようにも思える。柱穴からはまた次のような情報が読み取れる。底の標高を算出してみると3P(25.8m)、4P(25.9m)と1P(25.7m)、2P(25.7m)の間では10~20cmの差が見られる。この差を生んだ要因は木材の長さに依るのか、上層構造を反映するものなのか検討しなければならない課題であろう。次に木住居址の遺物について若干触れておく。完形の甕の中から滑石のチップが水洗選別で検出されているが、木住居を一切っている溝状遺構はもちろん住居址からは他にチップを含めて滑石あるいはその製品は一切見つかっていない。これはどのように理解すればよいのか、あるいは本遺構の性格を知る手がかりが示されているのかも知れない。もう一つ木住居の遺物で気になるのが球状土錘である。

今回検出された土錘には明らかに形態が異なる2種がある。一つは小振りでやや孔径が大きく一方の孔端に穿孔時の粘土の盛り上がりが見られ、表面には指頭状の成形痕が顕著なもの(第19図17~21)、もう一つはやや大振りで孔径が小さく穿孔時の盛り上がりも成形痕も顕著ではない、ほぼきれいな球形に整えられたもの(22~28)である。何故異なる2種があるのか、単に作り手の個性だけの理由なのだろうか。また19の球状土錘の孔内から炭化物が見つかっている。分析が間に合わず今回の報告では紹介できないが、明らかに普段見慣れた炭化材とは異なるということだけ記しておく。球状土錘については単なる漁労具という面だけではなく、もう少し資料を蓄積して考察したいと考えている。

平安時代に比定される第2号住居址であるが、遺物が少なく、また長期に人がいたという痕跡が乏しい住居である。竈燃焼部も使い込まれたという状況ではなく、第3号住居址と同様床面の硬化部も認められない。小規模な木遺跡の性格を何か暗示しているのだろうか。なお木住居址から検出された炭化材の樹種同定も行っており、その結果クヌギ節であることが判明している。

第1・2号土坑は共に燃焼部が認められるなど規模、形態が近似し、同じ性格の遺構と考えられるが、時代が特定できなかった。第2号土坑覆土の1a、1b層は黒色系の上層であり、今回その由来を知るためにテフラ分析を行っている(付編参照)。詳細は付編に譲るが、1a、1b層からは1108年(天仁元年)に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B)の軽石が認められ、状況から判断して第2号土坑はAs-B降灰当時すでに使用されなくなり、埋積が進んでいた可能性がある、と指摘されている。これが事実だとすると第2号土坑は平安時代以前の所産が考えられる。

以上紙面の許す範囲で忘いつくままに記した感は否めないが、これでひとまず本報告を閉じたいと思う。

最後になりましたが、試掘調査では縫竹のブッシュの中、真っ黒になりながら代わりにテストピットを掘っていたいたいた村下水道隊の皆さん、決して良い環境とは言えない厳しい条件の中、黙々と調査に取り組んで頂いた地元作業員の皆さんに改めてお礼申し上げます。

付 編

興津白井遺跡における自然科学分析

興津白井遺跡における自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

興津白井遺跡では、縄文時代の遺物包含層、古墳時代の住居跡、近世の可能性がある炭窯、時期不明の土坑などが検出されている。このうち、深掘部土層セクションや時期不明の第2号土坑からは、黒色の土壤が検出されている。また、古墳時代と平安時代の住居跡からは、住居構築材と考えられる炭化材が出土している。

今回の分析調査では、黒色土壤の由来を確認するためテフラ分析を行う。また、住居構築材と考えられる炭化材の樹種同定を行い、用材に関する資料を得る。

1. 黒色土壤のテフラ分析

(1) 試料

土壤サンプルは、no. 1～3の3点である。no. 1は、深掘部土層セクションより採取されている。深掘部土層セクションの土層断面では、上位よりⅠ層からⅥ層までの7層に分層されている。Ⅰ層は暗褐色土層、Ⅱ層は暗黄褐色土層、Ⅳ層～Ⅵ層は黄褐色を主体とするローム層であり、Ⅲ層はⅡ層とⅣ層の漸移層とされている。Ⅱ層は縄文時代早期～後期の土器が混在して出土する、遺物包含層である。no. 1は層上部のⅠ層内より採取されている。

no. 2および3は、第2号土坑覆土より採取されている。第2号土坑では、覆土が1a層～4層に分層されてい

る。土坑の底面あるいは壁面に接する2a・2b・3・4層は、ロームブロックあるいはローム粒を多く含む暗褐色～暗黄褐色土層である。1c層は、2a層を覆うように両側の壁面から土坑内に向かって堆積しており、ローム粒を多く含む暗褐色の上層である。1b層は1c層と2a層を覆い、断面では下に凸の弧のような形状の黒褐色の土層であり、ローム粒を多く含みしまりが悪い。1a層は1b層を覆い、覆土最上部に堆積しており、ローム粒子を少量含む締まりの悪い黒褐色土層である。no. 2は1a層、no. 3は1b層より採取されている。

(2) 分析方法

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象として観察し、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた纖維束状のものとする。

表1 テフラ分析結果

試料番号	出土層位	スコリア			火山ガラス		軽石			由来するテフラ
		単	色調・発泡度	最大粒径	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径	
1	深掘部土層Ⅰ層	+	B・sb,G・sb	1.0	++	cl・bw,cl・pm>br・bw	++++	GBr・sb,W・sg	2.0	As-E,K-Ah,AT
2	第2号土坑覆土1a層	++	B・sb～b	1.0	+++	cl・bw,cl・pm>br・bw	++	GBr・sb,W・sg	1.5	As-E,K-Ah,AT
3	第2号土坑覆土1b層	+	B・sb～b	0.8	+++	cl・bw,cl・pm>br・bw	+	GBr・sb,W・sg	1.2	As-E,K-Ah,AT

凡例 - : 含まれない、+ : 微量、++ : 少量、+++ : 中量、++++ : 多量。

B: 黒色、G: 灰色、Br: 褐色、R: 暗褐色、W: 赤色、W: 白色

g: 良好、sg: やや良好、sb: やや不良、b: 不良、最大粒径はmm

cl: 黑色透明、br: 褐色、bw: バブル型、pm: 軽石型。

(3) 結果

no. 1～3 の全ての試料にスコリア、火山ガラス、軽石が認められた。スコリアは、no. 1・3 に微量、no. 2 に少量含まれており、黒色を呈し発泡がやや不良なもの、灰色を呈し発泡がやや不良なものが認められる。これらのスコリアは、いずれも富士火山の完新世の活動により噴出したテフラ（新期富上テフラ）に由来すると考えられる。新期富上テフラは、泉ほか（1977）や、上杉（1990）などにより、最上位の富士宝永スコリア層（S-25）から最下位の富士黒上層（S-0）まで詳しく記載されているが、これらの新期富上テフラは噴出年代が異なっても給源が同じであるため、特徴が類似しているものが多い。そのため、今回のようにテフラが累層となりそれそれ単層で認められない場合には、個々のテフラの対比は難しい。

火山ガラスは no. 1 に少量、no. 2・3 に中量含まれている。どの試料にも無色透明のバブル型と軽石型、微量の褐色を呈するバブル型の火山ガラスが認められる。褐色を呈するバブル型火山ガラスと、無色透明のバブル型および軽石型火山ガラスの一部は、その特徴より鬼界一アカホヤ火山灰（K-A h : 町田・新井, 1978）に由来すると考えられる。K-A h は、約6300年前に九州地方の鬼界カルデラから噴出した広域テフラである（町田・新井, 1992）。また、無色透明のバブル型および軽石型火山ガラスの一部は、姶良Tn火山灰（A T : 町田・新井, 1976）に由来すると考えられる。A T は、南九州の姶良カルデラを給源とし、約2.2～2.5万年前に噴出した広域テフラである（町田・新井, 1992）。これらの2つのテフラの無色透明な火山ガラスについては、形態が類似しており個々のガラスについての分類は困難である。これらの分類は、火山ガラスの屈折率を測定することにより可能となる。しかし、今回の試料では、後述のように K-A h と A T 双方より降灰年代の新しい A s-B の軽石が混在する。したがって、火山ガラスの分類が堆積年代に直接関わる資料とはならないので、屈折率測定は行わない。

軽石は、no. 1 に多量、no. 2 に少量、no. 3 に微量含まれている。全ての試料に同様の特徴を持つ軽石が認められ、灰褐色を呈し発泡がやや不良なものと、白色を呈し発泡がやや良好なものが認められる。軽石によっては、斜方輝石の斑晶を包有するものも認められる。これらの軽石は、その特徴により A.D.1108年（天仁元年）に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（A s-B : 新井, 1979）に由来すると考えられる。

(4) 考察

no. 1～3 の試料に少量～中量認められる火山ガラスは、K-A h または A T に由来するものである。これらの火山ガラスは、一旦周辺地域に堆積したものが風塵となって舞い上がり、再び試料採取地点付近に堆積したもののが含まれていると考えられる。また、no. 2・3 の火山ガラスは、土坑周囲のロームや黒ボク土にもともと含まれていたものであり、それらが流れ込んだと考えられる。したがって、これらの試料が採取された層準は、全て K-A h が降灰した約6300年前以降に堆積した上層であるといえる。

no. 1 には、多量の A s-B の軽石が認められる。本遺跡周辺における A s-B の産状を考慮すると、基本土層の I 層内の no. 1 が採取された層準は、A s-B が降下堆積したものがほぼそのまま残された層準に近いと推定される。したがって、I 层内の no. 1 が採取された層準は、A s-B の降灰した A.D.1108年（天仁元年）頃に堆積した土層であると考えられる。

第2号土坑で認められる A s-B の軽石は、no. 2 で少量、no. 3 で微量であり、下層よりも上層に軽石が多く認められている。このような産状から、A s-B が 1b 層以下の土層の埋積時に降灰したとは考えにくい。no. 1 の A s-B の含有量と本地域における A s-B の産状を考慮すれば、1a 層の埋積時に A s-B が降灰したとは考えにくく、1a 層より上位層の埋積時に A s-B が降灰したと考えられる。no. 2・3 で検出された A s-B は植物根や昆虫、小動物による生物擾乱による搅乱作用を受け、降灰層準より下方に拡散したものである可能性がある。したがって、土坑は A s-B 降灰当時すでに使用されなくなり、埋積が進んでいた可能性がある。

ところで、今回分析した試料中には、テフラに由来する物質が多く含まれていることが確認された。したがって、今回分析した試料はその外見から、テフラを母材として生成した土壤すなわち「火山灰土」である。火山灰土は、色調からロームや黒ボク土と呼ばれることが多いが、これらは從来、小噴火による降下火山灰の堆積したものを母材とする説が主に支持されてきた。しかし最近の研究では、いったん堆積した火山灰が再び風によって移動し、風塵となって累積したものを母材とする説も主張されるようになっている（早川, 1995；鈴木, 1995など）。これに従えば、火山灰土の母材は定常的に堆積する火山碎屑物を主体とした風塵および噴火により、降下堆積したテフラの両者であるといえる。地表では、これらが堆積した後、植生からの有機物の供給により腐植の集

積が始まり土壤が形成される。火山灰土のうち黒ボク土については、他の土壤に比べて著しい腐植を積集するといわれている。これは、火山ガラスが化学的に風化して生成された活性アルミニウムと有機物が結合し、微生物に分解されにくいアルミニウム—腐植複合体ができるためである（三枝、1989）。今回分析を行った試料について、土壤調査でよく行われる活性アルミニウムテストを行ったところ、全ての試料に比較的多量の活性アルミニウムが含まれていることが確かめられた。したがって、今回分析を行った試料は黒ボク土であると考えられ、試料の黒色は腐植に由来すると考えられる。

2. 炭化材の樹種同定

(1) 試料

試料は、古墳時代中期の住居跡（第3号住居）の床面もしくは床面直上覆土から採取された炭化材4点（3JNo.33～36）と、平安時代の住居跡（第2号住居）の床面から出土した炭化材1点（2JNo.3）の合計5点である。

(2) 方法

木口（横断面）・柱目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3) 結果

炭化材は、全て落葉広葉樹のコナラ属コナラ属クヌギ節に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔隙部は1～2列、孔隙外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織がある。

(4) 考察

炭化材は、いずれも床面もしくは床面直上の覆土から出土していることから、垂木や上屋材などの住居構築材に由来すると考えられる。それらの樹種は、いずれも落葉広葉樹のクヌギ節であった。第2号住居が平安時代、第3号住居が古墳時代であるが、今回の結果を見る限り、

時代による用材の差異は認められない。

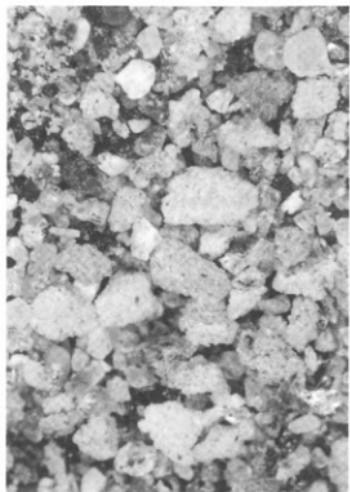
クヌギ節が多い結果は、野中遺跡第2次調査の第4号住居跡から出土した住居構築材の樹種同定結果とも一致する。これらの結果から、古墳時代から平安時代にかけて、本地域では住居構築材にクヌギ節が主として利用されていたことが推定される。

茨城県や千葉県等で行われた住居構築材の樹種同定結果では、沿海地で常緑広葉樹が多く、内陸部でクヌギ節・コナラ節が多くなる傾向があり、遺跡周辺の植生の差異を反映した結果と考えられている（高橋・植木、1994）。常緑広葉樹が多い地域と落葉広葉樹が多い地域の境界については、詳細は不明である。しかし、これまでの調査結果から、落葉広葉樹を主とした用材が行われていたことが推定される。

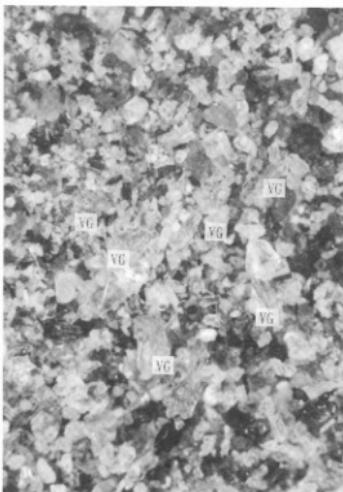
引用文献

- 新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層。考古学ジャーナル, 179, p.41-52.
- 早川由紀夫（1995）日本に広く分布するローム層の特徴とその成因。火山, 40, p.177-190.
- 泉 浩二・木越邦彦・上杉 隆・遠藤邦彦・原田昌一・小島泰江・菊原和子（1977）富士山東麓の沖積世ローム層。第四紀研究, 16, p.84-87.
- 町田 洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰-姶良Tn火山灰の発見とその意義-。科学, 46, p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰。第四紀研究, 17, p.143-163.
- 町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス, 276p., 東大出版。
- 三枝正彦（1989）黒ボク土、「土の化学」、季刊化学経説, 4, 198p., 日本化学会。
- 鈴木毅彦（1995）いわゆる火山灰土（ローム）の成因に関する一考察－中部・関東に分布する火山灰土の層厚分布－。火山, 40, p.167-176.
- 高橋 敦・植木真吾（1994）樹種同定からみた住居構築材の用材選択。PALYNO, 2, p.5-18, パリノ・サーヴェイ株式会社。
- 上杉 隆（1990）富士火山東方地域のテフラ標準柱状図－その1：S-25～Y-114－。関東の四紀, 16, p.3-28.

図版1 テフラ



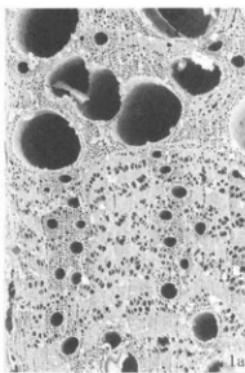
1. A s-Bの軽石
(no. 1; 深掘部土層セクション I 層)



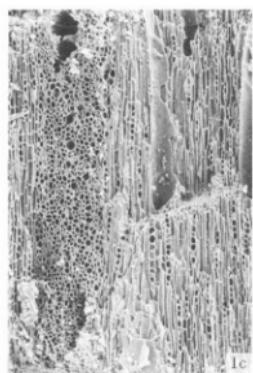
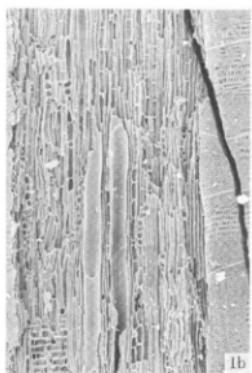
2. A T, K-A hの火山ガラス
(no. 3; 第2号土坑覆土 1b 層)
VG: 火山ガラス。

1mm
(1) (2)

図版2 炭化材



1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (3J No.33)
a : 木口, b : 柄目, c : 板目



— 200 μm : a
— 200 μm : b, c

付 表

繩文土器觀察表

土師器・須恵器・陶器觀察表

石器觀察表

土製品觀察表

縄文土器観察表

- 出土位置欄の「J」は縄文時代調査区を、「II」は基本上層II層を、「採」は採集資料を、「2J」は第2号住居址を、「3J」は第3号住居址を、「M」は溝状遺構をそれぞれ示す。「+」は接合関係をと、「()」は同一層段での接合破片数を示す。
- 整形、文様欄の「口」は口唇部、「口下」は口縁部直下、「胴」は胴部、「内」は内面、「外」は外面を示す。特に区別がない場合は外面を示す。→は整形・施文順序を示す。
- 胎土欄の「透」は透明もしくは半透明の、「白」は不透明白色の、「灰」は灰色の、「赤」は赤色の、「黒」は黒色の、「雲」は雲母の砂・鉱物粒が含まれていることを示し、「粗」は径1~2mmの前記の粒子が目立つことを示す。
- 色調欄で内外の区別がないものは、内外とも同じであることを示す。

縄文時代調査区、採集資料、第2・3号住居址、溝状遺構

団版番号	出土位置	整形・文様	胎 土	色調(内/外)	焼成	備 考
第8団	14 J II 口 RL / 口下 RL / 腕 RL	白粗・透粗・灰	淡橙褐色	良		
	15 採 内ヨコナデ / 口 RL / 口下 LR	白粗・透粗・灰	暗褐色	良		
	16 採 口 LR / 口下不明	白粗・透粗・灰・赤	暗橙褐色 / 淡黑色	良		
	17 採 口 LR	白粗・透粗・灰	淡橙褐色	良		
	18 J II 口 RL	透粗・白・灰	淡黑色	良		
	19 採 RL	白粗・透粗・灰	淡橙褐色	良	14と同	
	20 J II RL	透粗・白・赤	淡褐色	良		
	21 J II RL	白粗・透粗・灰	淡褐色 / 淡褐色	良		
	22 J II (2) RL	透粗・白・灰・雲	淡褐色 / 淡褐色	良		
	23 J II LR	白粗・透粗・灰・赤	淡黑色 / 淡褐色	良		
	24 21床 LR	透粗・白・灰	淡褐色	良		
	25 採 RL	透粗・白・灰・雲	淡橙褐色 / 暗褐色	良		
	26 採 RL	透粗・白・灰	淡橙褐色	良		
	27 採 RL	透粗・白・灰	淡褐色 / 淡赤褐色	良		
	28 J II LR	透・白・灰・赤	淡褐色	良		
	29 J II 燃余R	透・白・黒	淡黄色	良		
	30 採 内ヨコナデ / 燃余不明	透・白・灰	淡褐色	良		
	31 212層 燃余R	透・白・灰	淡黄色	良		
	32 J II RL	透粗・白粗・灰	淡橙褐色 / 淡褐色	良		
	33 J II LR	透粗・白・灰・赤	淡黑色 / 淡褐色	良		
	34 採 内ヨコナデ / 口刺突・キザミ / 口下斜横位沈線・斜位沈線・刺突	透粗・白・赤	橙褐色	良		
	35 採 内ヨコミガキ / 口下斜位沈線・平行沈線・刺突	透粗・白・灰	淡黄色	良		
	36 採 口下斜位沈線・貝殻腹縫	透粗・白・黒	淡橙褐色	良		
	37 採 斜位沈線・刺突	透粗・白・灰	淡黄色	良		
	38 採 斜位沈線・横位沈線	透粗・灰	淡褐色 / 淡赤褐色	良		
	39 212層 内ミガキ / 外ミガキ・斜位沈線・横位沈線	透粗・灰・黒	淡灰褐色 / 淡橙褐色	良		
	40 3J2層 斜位沈線・横位沈線	透粗・灰・黒	暗褐色 / 淡黄色	良		
	41 採 斜位沈線・横位沈線	透粗・灰・雲	淡灰褐色 / 暗褐色	良		
	42 採 横位沈線	透・黒	淡赤褐色	良		
	43 採 斜位沈線	透・白・黒	淡橙褐色	良		
	44 J II (2) 内ヨコミガキ / 外横位ケズリ	透粗・雲	淡赤褐色 / 淡黄色	良	44 ~ 47は同	
	45 J II (2) 内ヨコミガキ / 外横位ケズリ	透粗・雲	淡赤褐色 / 淡黄色	良		
	46 J II 内ヨコミガキ / 外横位ケズリ	透粗・雲	淡赤褐色 / 淡黄色	良		
	47 J II 内ヨコミガキ / 外横位ケズリ	透粗・雲	淡赤褐色 / 淡橙褐色	良		
	48 採 外横位ケズリ	透粗・雲	淡黄色	良		
	49 M覆土 外横位ケズリ	透粗・雲	淡黄色	良		
	50 M覆土 外横位ケズリ	透・赤・黒	淡褐色	良		
	51 J II (2) 外ヨコナデ	透・白・赤・黒	淡黄色 / 淡橙褐色	良		
	52 M覆土 外横位ケズリ	透粗	淡黄色	良		

図版番号	出土位置	整形・文様	胎土	色調(内/外)	焼成	備考
第9回	53 J II	内ヨコナデ／口下ナデによる太沈線／胴斜位ケヌリ	透・白	淡黒褐	良	
	54 J II	内ミガキ／外横位ケヌリ／ヨコナデ	透・白	淡黄褐(一部淡黒褐)	良	
	55 J II	内ミガキ／外横位ケヌリ／ヨコナデ	透・白	淡黄褐(一部淡黒褐)	良	54と同一
	56 採	内ミガキ／外横位ケヌリ／ヨコナデ	透・白	淡黄褐	良	
	57 採	内縦位ミガキ／外ヨコナデ	透・白・灰	淡黒褐／淡棕褐	良	
	58 採	内縦位ミガキ／外ヨコナデ	透・白・灰	棕褐／淡黄褐	良	57と同一
第10回	59 採	内ミガキ／外横位ケヌリ／ヨコナデ	透・白・雲	淡黄褐	良	
	60 M巻上	内ミガキ／外の單軸絡条体第5類?	織維・透・白	淡棕褐	良	
	61 採	Lの側面压痕	織維・透・白	黑褐／淡棕褐	良	
	62 M巻土	Lの側面压痕	織維・透・白	黑褐／淡棕褐	良	61と同一
	63 3J II層	Lの側面压痕	織維・透・白	淡墨褐／淡棕褐	良	
	64 採	Rの側面压痕	織維・透・白	暗褐／淡褐	良	
	65 採	横位沈線	織維・透・白・灰	淡黒褐～淡黄褐／淡棕褐	良	
	66 M巻上	波状沈線	織維・透・白	淡黄褐／暗褐	良	
	67 M巻土	波状沈線	織維・透・白	淡褐	良	
	68 採	斜交する波状沈線	織維・透・白	淡褐	良	
	69 採	沈線	織維・透・灰	淡褐／淡棕褐	良	
	70 採	平行沈線	織維・透	淡棕褐／淡黒～棕褐	良	
	71 採	RL一半竹管文	織維・透・白・灰	淡黄褐	良	
	72 採	平行沈線	織維・透・白	淡棕褐／淡黄褐	良	
	73 3J I層	平行沈線・刺突	織維・透・白	淡赤褐／暗褐	良	
第11回	74 M巻土	貝殻腹縫文	織維・透・白	淡赤褐／淡棕褐	良	
	75 採	貝殻腹縫文	織維・透・白	淡褐／淡黒褐	良	
	76 採	貝殻腹縫文	織維・透・白	淡黄褐	良	
	77 採	口底体压痕キザミ／口下R側面压痕・LR結節	織維・透・白	淡黒褐／淡黒～棕褐	良	
	78 採	内ミガキ／外平行沈線・刺突・附加条1種(LK)附加1条(r)	織維・透	淡棕褐	良	
	79 3J I層	LR結節	織維・透	淡黒褐／淡赤褐	良	
	80 採	LR羽状縫文	織維・透・白	淡黄褐／淡棕褐	良	
	81 採	LR	織維・透・白	淡黄褐／淡棕褐	良	
	82 採	RL	織維・透・白	淡褐／淡棕褐	良	
	83 採	LR	織維・透・白	淡褐／淡棕褐	良	
	84 採	LR	織維・透・白・黒・赤	淡棕褐／淡黒褐	良	
	85 採	RL	織維・透・白・灰	淡赤褐／淡黒褐	良	
	86 採	内ミガキ／外RL	織維・透・白・灰	淡黄褐	良	
	87 採	口頭状压痕／口下波状貝殻文	透粗・白・灰	淡黄褐	良	
	88 採	内ミガキ／外横位ケヌリ・表貝殻文	透・白・赤	棕褐／暗褐	良	
	89 採	外ミガキ／波状貝殻文	透・白	淡黄褐／淡黒褐	良	
	90 採	内ミガキ／波状貝殻文	赤粗・透・白	淡棕褐	良	
91 J II	波状貝殻文	赤・透・白	淡黄褐	良		
92 J II	口指頭状压痕／口下波状貝殻文	透・黒	淡黄褐	良		
93 採	波状貝殻文	透・白	淡黄褐	良		
94 採	波状貝殻文	赤粗・透・白	淡棕褐	良		
95 J II	波状貝殻文	透粗・白粗	淡黄褐／淡黒褐	良		
96 採	内ヨコナデ／口下波状貝殻文	透・白	淡棕褐／淡褐	良		
97 J II	内～ロヨコナデ／口下波状貝殻文	透・白・灰	淡棕褐	良		
98 J II	口下波状貝殻文	透・白・灰	淡棕褐	良	波状口縁	
99 採	波状貝殻文	透・白・黒	淡棕褐	良		
100 J II	波状貝殻文	透粗・白・灰	淡黄褐／淡棕褐	良		
101 採	波状貝殻文	透・白・灰・赤	淡褐	良		
102 J II	波状貝殻文	透・白・灰	淡棕褐／淡褐	良		
103 採	内ミガキ／外貝殻腹縫文一沈線 区画一磨消	透・灰	淡黄褐／淡黄褐～ 一部黒褐	良	良	
104 J II	内ミガキ／外貝殻腹縫文一沈線区画	透・白・赤・青	淡褐／暗褐	良		
105 J II	内ミガキ／外貝殻腹縫文一沈線区画	透・白・赤・雲	淡褐／暗褐	良	104と同一	
106 J II	内ミガキ／外貝殻腹縫文	透・赤	淡黄褐	良		
107 採	内ヨコナデ／外貝殻腹縫文	透	淡黒褐／淡黄褐	良		
108 採	口指頭状压痕／口下刺突	透	淡褐	良		
109 採	刺突	透・白	淡黄褐／淡赤褐	良		

図版番号	出土位置	整形・文様	胎土	色調(内/外)	焼成	備考
第11図	110 J II	内ヨコミガキ／口下垂下沈縁～透		暗黄褐色/淡黄褐色	良	
		平行沈縁		淡黄褐色	良	
	111 J II	平行沈縁	透・灰	淡黄褐色	良	
	112 採	平行沈縁	透・白	淡褐色/暗褐色	良	
	113 採	平行沈縁	透・白・灰	暗褐色/略黄褐色	良	
	114 J II	平行沈縁	透・白・灰	淡褐色	良	
第12図	115 採	平行沈縁	透・灰	淡赤褐色	良	
	116 J II	内ナデ/外条縁	透・白	淡橙褐色	良	
	117 J II	内ヨコナデ/外嵌位ナデ	透・白・灰	淡黄褐色	良	折返口縁
	118 J II + 採	口指腹状圧痕	透・白	淡黄褐色	良	折返口縁
	119 採	口唇跡ヨコナデ/口下地圓压痕	透・白	淡黄褐色/暗褐色	良	折返口縁
	120 採	結節浮彌文・浮彌文	透・白	黑褐色/淡橙褐色	良	
	121 M覆土	口下地文LR・三條結節沈縁	透・灰・雲	淡褐色	良	
	122 311 葵	内ミガキ/地文RL・一線筋沈縁	透・灰	淡橙褐色/黑褐色	良	
	123 M覆土	内ミガキ/外結節沈縲	透	淡褐色	良	
	124 採	内ヨコミガキ/ヨキザミ/口下地文～隆帯に乳・隆帯に沿って結節沈縲	透・白・灰	淡黄褐色	良	波状口縁
	125 採	地文LR→ボタン貼付・擦痕状沈縲	透・白・黒	淡橙褐色	良	
	126 採	地文～隆帯上RL	透粗・白粗	暗褐色/淡赤褐色	良	
	127 J II	内ヨコナデ/地文～隆帯上RL結節	透・赤	明褐色/淡橙褐色	良	
	128 採	内ヨコナデ/ロ下結節沈縲区画	透	淡黄褐色	良	
第13図	129 採	内ミガキ/口下手沿結節沈縲	透・白	淡黄褐色	良	
	130 採	内ナデ/外隆帯沿結節沈縲・ヒダ状	透粗・白・雲	明褐色	良	
	131 採	内ヨコナデ/外ケズリ→ナデ・結節沈縲・ヒダ状	透・白・赤	淡黄褐色	良	
	132 採	内ヨコナデ/外結節沈縲	透・白・灰	明褐色	良	
	133 採	隆帯沿結節沈縲	透・灰・雲	明褐色	良	
	134 採	内ヨコナデ/外ヒダ状	透・灰・雲	明褐色/淡橙褐色	良	
	135 採	内ヨコナデ/外ケズリ→一陣帯	透粗	明褐色/淡橙褐色	良	
	136 採	RL→沈縲	透粗・白	淡黄褐色/黑褐色	良	
	137 212 層	内ミガキ/外LR→沈縲区画→磨削?	透	淡黄褐色～淡橙褐色	良	
	138 採	沈縲区画内刺突	透・白	淡黄褐色/黑褐色	良	
	139 採	沈縲・刺突	透・白	淡橙褐色/淡黄褐色	良	
	140 J II	沈縲・刺突	透・白	淡黄褐色/黑褐色	良	
	141 J II	沈縲・刺突	透・白	淡黄褐色/黑褐色	良	140と同一
	142 採	内ミガキ/外沈縲・短沈縲	透・白	暗褐色/棕褐色	良	
	143 J II	内～ロ下ヘラナデ/脚隆帯下条縲	透・白	淡橙褐色/淡黄褐色～一部黒斑	良	143～152は同一
第14図	144 採	内ミガキ/外条縲文	透・白	淡橙褐色/淡橙褐色～淡黄褐色	良	
	145 採	内ミガキ/外条縲文	透・白	淡橙褐色/淡橙褐色～淡黄褐色	良	
	146 2J 覆土	内ナデ/外条縲文	透・白	淡橙褐色/淡橙褐色～淡黄褐色～一部黒斑	良	
	147 J II	内ミガキ/外条縲文	透・白	淡黄褐色/暗褐色	良	
	148 採	条縲文	透・白	淡橙褐色/淡橙褐色～墨褐色	良	
	149 J II	内ナデ/外条縲文	透・白	淡橙褐色/黑褐色	良	
	150 採	条縲文	透・白	淡橙褐色/墨褐色	良	
	151 J II	条縲文	透・白	淡橙褐色/黑褐色	良	一部煤付着
	152 J II	内底位ナデ/外条縲文	透・白	淡橙褐色	良	
	153 J II (2)	内底位ナデ/外条縲文	透・白・灰	淡橙褐色	良	
	154 採	条縲→沈縲	透・白	淡墨褐色/淡黄褐色～墨褐色	良	
	155 採	条縲→沈縲	透・白・灰	淡黄褐色/淡黄褐色～墨褐色	良	
	156 J II	条縲・沈縲	透・白・灰	暗褐色/淡黄褐色	良	
	157 M覆土	内ナデ/外ミガキ→斜交沈縲	透・白・灰	明褐色/赤褐色	良	
	158 採	内横部ヘラナデ/外ヘラナデ→透・白		淡橙褐色	良	
		沈縲・円形削取り				
	159 採	内横部ヘラナデ/口剥突/ロ下沈縲	透・白	淡橙褐色/淡橙褐色～淡黄褐色	良	
	160 採	斜交沈縲	透・白	淡黄褐色	良	
	161 J II	沈縲	透・白	淡黄褐色/淡橙褐色	良	

図版番号	出土位置	整形・文様	胎 土	色調(内/外)	施成	備 考
第14図	162 2J2層	RL-沈縫	透粗・白粗	暗褐色/淡黄褐色	良	
	163 採	RL-沈縫	透・白	淡青褐色	良	
	164 採	隆縫→RL-沈縫	透粗・白	淡灰褐色/明褐色~暗褐色	良	
	165 採	LR-沈縫	透・白	淡褐色~黑褐色~淡黄褐色	良	
	166 採	内ヨコナデ/外LR	透・白	淡橙褐色	良	
	167 J II	内ヨコミガキ/口下降縫・LR	透	淡黄褐色/淡黑色	良	胎土緻密
	168 J II (2)+採(4)	内嵌位ミガキ/外LR	透・白	暗褐色/淡黄褐色~淡橙褐色	良	煤付春
	169 J II (2)	内嵌位ミガキ/外LR	透・白	暗褐色~淡黄褐色/煤	良	
	170 J II	内ミガキ/外LR	透・白	淡黄褐色/淡橙褐色	良	168~170は同一 煤付春
	171 採	「6」の字状貼付・刺突	透・白・灰	明褐色/暗褐色	良	
第15図	172 採	内ヨコナデ/隆縫→附加条1種 (RL)附加条1条(R)?	白粗・透	淡黄褐色/暗褐色	良	
	173 採	附加条1種(RL)附加条1条(R)?・ 粘飾2条(R)	白粗・透	淡黄褐色	良	172と同一
	174 採	L結節	白	淡橙褐色/黑色	良	
	175 採	内ミガキ/外L結節	透・白・灰	橙褐色/淡粉褐色	良	
	176 採	LR結節	透・白	淡褐色/淡黑褐色	良	
	177 採	内ミガキ/ L結節	白	淡橙褐色	良	
	178 採	LR結節	透・白・灰	淡橙褐色/黑色	良	
	179 J II	LR結節	透・白	淡橙褐色/淡黑色	良	異条?
	180 採	L結筋	透・白	淡赤褐色	良	
	181 採	LR結筋	透・白	淡橙褐色/淡黑色	良	
	182 採	L結筋	透・白	淡橙褐色	良	
	183 採	内ナデ/外L結筋	透・白	淡橙褐色/赤褐色	良	
	184 2J2層	内ヨコナデ/外LR側面压痕	白粗・透粗	淡黑褐色/灰褐色	良	
第16図	185 2J覆土	内ヨコナデ/外LR-LR側面压痕	白粗・透粗	淡褐色/灰褐色	良	184と同一
	186 採	ロキザミ/内ヨコナデ/外ヨコナ デ・+L	透・白	淡橙褐色/淡橙褐色~ 一部黒褐色	良	
	187 採	ロキザミ/内ヨコナデ/外ヨコナ デー+L	透・白	淡黄褐色/淡橙褐色	良	186と同一
	188 採	口原体圧痕/口下太沈縫→L	透・白	淡黃褐色/淡棕褐色	良	
	189 採	内ミガキ/外LR	透粗・白	淡黃褐色/淡黃褐色~ 淡黑褐色	良	
	190 採	内ミガキ/外LR	透・白	淡橙褐色/淡赤褐色	良	
	191 採	内ナデ/外L	透・白	淡橙褐色/淡黃褐色	良	
	192 採	内ミガキ/外柔痕	透・灰	赤褐色/淡青褐色	良	
	193 採	内ナデ/底部ナデ	透・白	黑褐色~淡赤褐色/淡赤褐色	良	

豊穴状遺構

図版番号	出土位置	整形・文様	胎 土	色調(内/外)	施成	備 考
第23図	1 2層	内ミガキ/外ミガキ・撲糸L	透・灰	淡黄褐色	良	胎土緻密
	2 2層	内ミガキ/外ミガキ・撲糸L	透・灰・赤	淡黄褐色	良	
	3 2層	内ミガキ/外ミガキ・撲糸L	透・灰・赤	淡黄褐色	良	内面剥落
	4 2層	内ミガキ/外ミガキ・撲糸L	透・灰・赤	淡黄褐色	良	内面剥落/1~4は同一
	5 1層	撲糸L	透・白	淡黑褐色/明褐色	良	胎土緻密
	6 覆土	波状貝殻文・刺突	透・白	暗~黒褐色/黒褐色	良	折返口線
	7 2層(2)	内ミガキ/外ミガキ・沈縫・貝殻 腹縫文	透粗・白・灰	暗褐色/淡赤褐色	良	
	8 2層	内ミガキ/外ミガキ・沈縫・刺突	透粗・白	暗褐色/明褐色	良	
	9 1層	内ミガキ/外ミガキ・平行・斜沈縫	透粗・白	暗褐色/明褐色	良	
	10 サブトレ	波状貝殻文	透・白	淡黄褐色/黒褐色	良	
第24図	11 サブトレ	波状貝殻文	透・白	淡褐色/淡黄褐色~黒褐色	良	
	12 サブトレ	内ミガキ/外波状貝殻文	白	黒褐色~淡黄褐色/淡黄褐色	良	胎土緻密
	13 サブトレ	内ミガキ/外沈縫区面・且豊肥縫文	透・白	赤褐色~淡黄褐色/淡黄褐色	良	
	14 2層	内ミガキ/外沈縫・貝殻腹縫文	透粗・白粗	淡橙褐色/淡黄褐色	良	
	15 1層(2)	内ヨコナデ/口指頭状痕/口下 RL結節	透粗・白	赤褐色/赤褐色~暗褐色	良	
	16 2層	内ヨコナデ/口指頭状痕/口下 RL結節	透粗・白	淡橙褐色/橙~黒褐色	良	波状口線?

図版番号	出土位置	整形・文様	胎土	色調(内/外)	焼成	備考
第24図	17 サブトレ	RL羽状・結節	透粗・白	赤褐色/淡橙褐色～黒褐色	良	
	18 2層	内ナデ/外RL結節	透粗・白	赤褐色/淡橙褐色～黒褐色	良	
	19 2層	内ナデ/外 RL	透粗・白	暗褐色/棕褐色	良	
	20 サブトレ	内ナデ/外 RL羽状・結節	透粗・白	暗褐色/棕褐色	良	15~20回
	21 覆土	内LR側面压痕/口原体?キザミ/L下LR	透・白	暗褐色/赤褐色	良	内面一部剥落
	22 サブトレ	LR	透・白粗	淡黃褐色/淡黃～淡綠褐色	良	
	23 2層	RL一結節浮線文	透・白粗	黒褐色	良	内面輝付有
	24 2層	結節浮線文・浮線文	透・白・黒	暗褐色/淡黃褐色	良	

第1号土坑

図版番号	出土位置	整形・文様	胎土	色調(内/外)	焼成	備考
第27図	1 覆土	内ミガキ/外RL羽状	鐵錫・透粗・白	淡黃褐色/淡橙褐色	良	
	2 2層	内ミガキ/外平行沈線	鐵錫・透・白	淡橙褐色/淡黃褐色	良	
	3 2層	内ミガキ/外平行沈線	鐵錫・透・白	淡橙褐色/淡黃褐色	良	
	4 2層	平行沈線	鐵錫・透・白	黒褐色/淡橙褐色	良	2~4は同
	5 覆土	条線文	白	淡橙褐色	良	

第2号土坑

図版番号	出土位置	整形・文様	胎土	色調(内/外)	焼成	備考
第28図	1 覆土	内ミガキ/外RL結節	鐵錫・透	淡黒褐色/黒褐色	良	
	2 覆土	結節	透・白	淡黃褐色/淡赤褐色	良	原体不明
	3 覆土	内ミガキ/外LR	透粗・白粗・墨	淡黑褐色/淡黃～黒褐色	良	
	4 覆土	内ミガキ/外垂下微陣帶・ヒダ状	透・白・灰	淡黃褐色/黒褐色～淡橙褐色	良	
	5 覆土	条線文	白	淡橙褐色	良	

土師器・須恵器・陶器観察表

- 出土位置欄の「+」は接合関係を示し、()は接合した破片数を示す。(主)は他の位置から検出された破片と接合して完形またはほぼ完形になった個体で、その個体の上になる部分が検出された位置を示す。
- 法量欄の単位はcmである。()は復元推定値。
- 胎土欄は縄文土器観察表に準ずる。
- 残存率欄の()は図示した部位のものである。

第3号住居址

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第18図 1	床上	土師器 甕	口径 14.4 胴径 23.6 高さ 26.4 底径 6.8	外面一口縁部ヨコナデ、 胴部ナデ、底部ケヅリ 内面一口縁部ヨコナデ、 胴部ナデ	透粗 白粗	外面一露褐 ~赤褐 内面一黑褐	良	100%	内部充填土より 滑石チップ
第18図 2	床上(主) +2層(1)	土師器 壺	口径 14.6 胴径 20.0 高さ 20.0 底径 5.6 孔径 1.0	外面一口縁部ヨコナデ、 胴部・底部ナデ 内面一口縁部ヨコナデ、 胴部ナデ	透 白 灰	外面一淡橙褐 ~黑褐 内面一淡黑褐	良	100%	口縁部隆起 / 横 成後底部穿孔 / 内部充填土より 炭化材
第18図 3	床上	土師器 甕	口径 16.8 胴径 14.0 底径 4.4 孔径 1.2	内外面一口縁部ヨコナデ、 胸部ヘラナデ	透 白	外面一淡赤褐 ~黑褐 内面一淡黄褐 ~淡水褐 ~黑褐	良	90%	胎土緻密 内部充填土より 第6図2の石器
第18図 4	床上	土師器 鉢	口径 9.6 高さ 4.8 底径 2.0	外面一口縁部ヨコナデ、 胴部ヘラケヅリ 内面一口縁部ヨコナデ、 胴部ナデ	透 白 灰	外面一淡褐褐 ~黑褐 内面一黑褐 ~淡橙褐	良	90%	
第18図 5	溝状遺構 覆土中	土師器 壺	口径 8.0 胴径 8.4 高さ 10.4 底径 2.4	外面一口縁部ヨコナデ、 胴部ナデ 内面一口縁部ヨコナデ	白	外面一黑褐 ~淡黄褐 内面一淡棕褐 ~黑褐	良	60%	胎土緻密 胴部に布目状痕
第18図 6	床上	土師器 脚付 小形壺	口径 11.2 胴径 10.8 高さ 16.4 底径 12.4	外面一口縁部・裾部ヨコ ナデ、脚部ナデ 内面一口縁部・裾部ヨコ ナデ、脚部ナデ・脚部ナデ	透 白	外面一淡赤褐 ~黑褐 内面一淡棕褐	良	90%	壺部内部充填土 より炭化材
第18図 7	床上	土師器 高环	口径 18.4 高さ 14.8 底径 14.0	外面一口縁部・裾部ヨコ ナデ、坏部・脚部ヘラナデ 内面一口縁部・裾部ヨコ ナデ、坏部ナデ、脚部ヘラ ナデ	透 白	外面一淡橙褐 内面一黑褐	良	90%	
第18図 8	床上	土師器 高环	口径 19.2 高さ 14.0 底径 14.8	外面一口縁部・裾部ヨコ ナデ、坏部・脚部ヘラナデ 内面一口縁部・裾部ヨコ ナデ、坏部ナデ、脚部ヘラ ナデ	透 白	外面一淡棕褐 内面一淡黄褐 ~黑褐	良	95%	
第18図 9	床上	土師器 高环	口径 18.4 高さ 14.4 底径 12.8	外面一口縁部ヨコナデ、 坏部・脚部ヘラナデ 内面一口縁部ヨコナデ、 坏部ナデ・脚部ヘラナデ	透 白	外面一黑褐 ~淡黄褐 内面一黑褐 ~淡赤褐	良	80%	坏部充填土より 炭化材
第18図 10	床上	土師器 高环	口径 17.6 高さ 14.4 底径 15.2	外面一口縁部・裾部ヨ コナデ、坏部・脚部ヘラナ デ	透 白	外面一淡黄褐 ~棕褐 内面一棕褐 ~淡黑褐	良	90%	

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第18図 11	床上覆土 (土) + 1層(1)	土師器 高杯	口径 19.2 高さ 14.4 裾径 14.4	外面 - 口縁部・脚部ヨコナデ、环部・脚部ナデ 内面 - 口縁部・裾部ヨコナデ、环部・脚部ヘラナデ	透白灰	外面 - 淡黄褐色 内面 - 灰褐色	良	80%	
第18図 12	貯藏穴 (土) + 床上覆土 (1)	土師器 高杯	口径 18.0 高さ 16.4 裾径 14.0	外面 - 口縁部・裾部ヨコナデ、环部・脚部ヘラナデ 内面 - 口縁部・脚部ナデ	透灰	外面 - 淡黄褐色 内面 - 淡黄褐色 ~灰褐色	良	85%	环部充填土より炭化材
第18図 13	床上(七) +2層(1)	土師器 高杯	口径 21.0 高さ 14.8 裾径 17.2	外面 - 口縁部・脚部ヨコナデ、环部・脚部ヘラミガキ 内面 - 口縁部・裾部ヨコナデ、环部ミガキ?・脚部ナデ?	透白	外面 - 淡赤褐色 ~黒褐色	良	90%	
第18図 14	床上	土師器 高杯脚鉢	高さ 9.8 裾径 12.4	外面 - 脚部ヨコナデ、脚部ナデ 内面 - 脚部ヨコナデ、脚部ヘラナデ	透白	外面 - 黒褐色 ~淡黄褐色 内面 - 淡赤褐色	良	(80%)	
第18図 15	床上	土師器 高杯脚部	高さ 10.0 裾径 11.6	外面 - 脚部ヘラナデ 内面 - 脚部ナデ?	透白	外面 - 淡黄褐色 内面 - 灰褐色	良	(70%)	
第19図 16	床上覆土	土師器 高杯結合部	活潑 3.4 高さ 3.6	外面 - ヨコナデ?	透灰	外面 - 淡橙褐色 ~黑褐色 内面 - 淡黄褐色	良	(100%)	

第2号住居址

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第21図 1	床上	須恵器 杯蓋	径 13.8 高さ 2.4	輪縁成形(左回) 内外面 - ヨコナデ	白粗	外面 - 淡灰 ~一部自然釉 内面 - 淡灰 ~口辺 - 部黒	良	80%	つまみ欠損
第21図 2	床上	須恵器 杯	径 (14.2) 高さ (3.6)	輪縁成形 内外面 - ヨコナデ	白	外面 - 暗灰 内面 - 淡黄褐色	良	20%	内面に一部漆状付着物
第21図 3	2層	土師器 甕?		内外面 - ナデ?	透・白・灰	外面 - 淡橙褐色 内面 - 淡赤褐色	良		墨書き
第21図 4	カマト内 甕底部	土師器 甕底部		内外面 - ナデ?	透・白・灰	外面 - 淡黒褐色 内面 - 暗赤褐色	良	(20%)	底部木葉痕

炭窯状造構

図版番号	出土位置	器種	法量	整形	胎土	色調	焼成	残存率	備考
第30図 1	炭化室	陶器 大甕	口径 (40)	内外面 - ヨコナデ 外而鉄軸	透白	外面 - 黑褐色 内面 - 淡赤褐色	良	(10%)	

石器観察表

・出土位置欄の記号は縄文土器観察表、凡例注記に準ずる。但し堅穴状遺構は「堅」とする。

・長さ、幅、厚さの単位はcm、重さはgである。

団版番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
第6図1	J II	剥片	4.5	5.7	1.1	32.3	頁岩	躍打面
第6図2	3 J	剥片	4.8	2.1	0.9	6.0	頁岩	末端折れ 第18図3土器内より
第6図3	3 J	剥片	2.8	4.0	0.9	11.5	頁岩	点打面/右側縫折れ/末端微細剝離
第6図4	2 D	剥片	4.3	3.8	1.0	12.1	玉隨	平坦打面/未端折れ
第6図5	3 JM中	剥片	5.0	4.1	1.0	18.9	凝灰岩	平坦打面
第6図6	J II	剥片	5.3	3.6	1.3	28.3	硬砂岩	左側縫状剝離/風化
第6図7	3 J	剥片	3.5	2.3	0.6	5.6	頁岩	打面欠損/風化
第6図8	2 D	剥片	3.2	1.2	0.3	1.2	頁岩	打面欠損/風化
第7図9	3 J	剥片	5.5	5.7	1.7	51.6	泥岩	平坦打面/右側縫状剝離/風化
第7図10	M	剥片	3.3	6.1	1.0	21.0	泥岩	平坦打面/風化
第7図11	J II	剥片	4.9	3.1	1.7	21.0	泥岩	風化
第7図12	M	剥片	—	2.1	2.9	0.6	3.1	泥岩
第7図13	J II	剥片	1.9	—	1.5	0.7	泥岩	風化
第15図195	探	スタンプ形石器	12.1	8.0	3.0	375.0	石英粗面岩	
第21図6	2 J 床上	磨石	10.3	6.2	3.9	310.0	硬砂岩	トーン部磨減痕
第24図25	堅サブトレ	打製石器	11.2	7.1	4.2	425.0	硬砂岩	両側縫磨滅

土製品観察表

・出土位置欄の記号は前掲観察表に準ずる。

・球状土錘の高さは穿孔方向のもの。高さ、幅、孔径、厚さの単位はcm、重さはgである。()は残存部での値。

・胎土欄は縄文土器観察表に準ずる。

・球状土錘考査欄の「A」は指頭状成形痕が明瞭で開孔部の一端に穿孔時の粘土盛り上がりが顕著に認められるもの、「B」はほぼ整った球形に成形され開孔部の粘土盛り上がりが顕著でないものを示す。

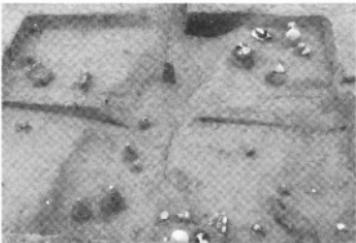
団版番号	出土位置	種類	高さ ＊長さ	幅	孔径 ＊厚さ	重さ	形成形態等	色調	胎土	焼成	残存率 (%)	備考
第19図17	3 J 床上 覆土	球状土錘	2.8	3.0	0.6	23.0	ナデ	黒褐色～ 淡黄褐色	透・白	良	100	A
第19図18	3 J 床上 覆土	球状土錘	2.6	3.1	0.6	21.8	ナデ	黒褐色～ 淡黄褐色	透・白	良	100	A
第19図19	3 JM 覆土	球状土錘	2.8	2.9	0.6	23.2	ナデ	黒褐色～ 淡黄褐色	透・白	良	100	A 孔内に炭化物
第19図20	3 J 床上 覆土	球状土錘	2.9	2.9	0.6	25.5	ナデ	黒褐色～ 淡黄褐色	透・白	良	100	A
第19図21	3 J 床上	球状土錘	2.9	3.0	0.6	23.4	ナデ	黒褐色～ 淡黄褐色	透・白	良	100	A
第19図22	3 J 床上 覆土	球状土錘	3.3	3.3	0.5	33.8	ナデ	黒褐色～ 淡橙褐色	白	良	100	B 孔内に焼土
第19図23	3 JM 覆土	球状土錘	3.0	2.9	0.6	24.3	ナデ	黒褐色～ 淡棕褐色	透・白	良	100	B
第19図24	3 J 床上 覆土	球状土錘	3.2	3.4	0.5	33.4	ナデ	黒褐色	透・白	良	100	B
第19図25	3 JM 覆土	球状土錘	2.9	3.1	0.5	25.6	ナデ	黒褐色～ 淡棕褐色	透・白	良	100	B
第19図26	3 J 床上 覆土	球状土錘	3.3	3.4	0.5	36.0	ナデ	黒褐色～ 淡棕褐色	透・白	良	100	B
第19図27	3 JM 覆土	球状土錘	3.0	3.2	0.5	30.2	ナデ	黒褐色～ 淡棕褐色	透・白	良	100	B
第19図28	3 J サブ トレ	球状土錘	(2.8)	3.4	0.5	(32)	ナデ	黒褐色～ 淡棕褐色	透・白	良	70	B
第15図194	探	土製耳飾	(3.1)	(1.7)	*1.1	(6.7)	ミカギ	黒褐色～ 淡棕褐色	透・白	良	20	
第21図5	2 J 2層	土製円盤	*3.1	3.1	*0.8	9.1	打ち欠き 磨り	透・白 ・灰	良	100	土師漆窯？破 片利用	

写真図版

図版1 桧文時代調査区・第3号住居址



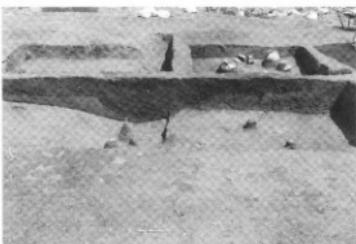
縄文時代調査区深掘部土層断面



第3号住居址全景（北西より）



縄文時代調査区出土状況（南東より）



第3号住居址土層断面（北西より）



縄文時代調査区出土状況（北より）



第3号住居址貯蔵穴出土状況（南西より）

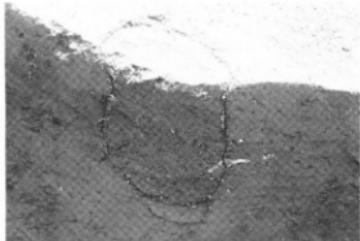


縄文時代調査区出土状況（北東より）

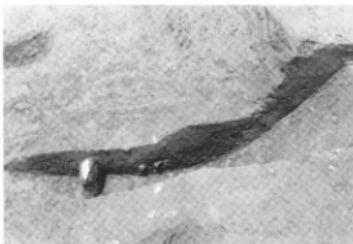


第3号住居址3P土層断面（北より）

図版2 第3・2号住居址



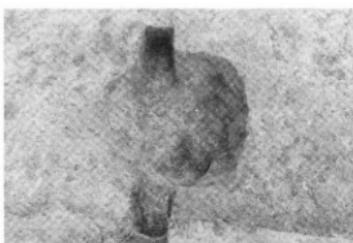
第3号住居址4P土層断面（西より）



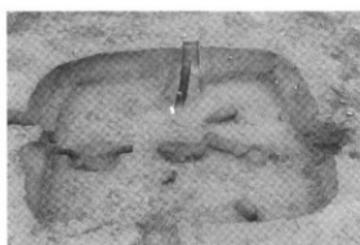
第2号住居址4P土層断面（東より）



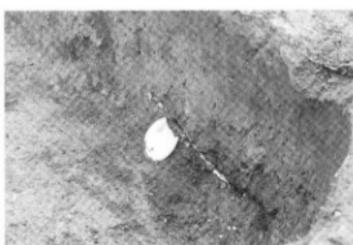
第3号住居址1P掘方及底部変色（南より）



第2号住居址4P土層断面（西より）



第2号住居址全景（南より）

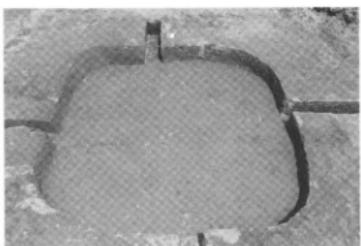


第2号住居址須恵器壺蓋出土状況（西より）



第2号住居址土層断面（北より）

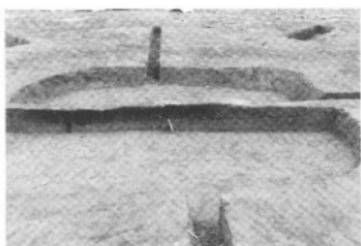
図版3 棚穴状遺構・第1・2号土坑・炭窯状遺構



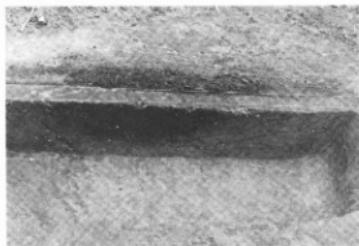
棚穴状遺構全貌（西より）



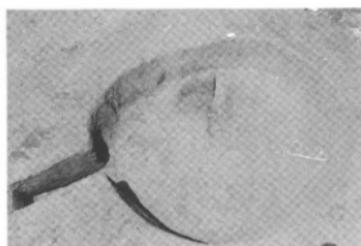
第2号土坑全貌（南より）



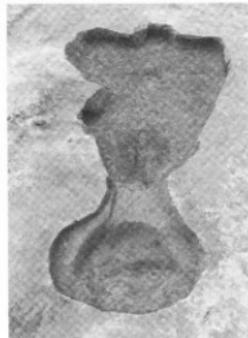
棚穴状遺構土層断面（南より）



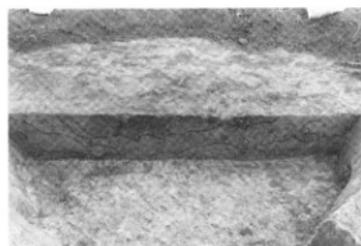
第2号土坑土層断面（西より）



第1号土坑全貌（南より）



炭窯状遺構全貌
(南東より)



第1号土坑土層断面（西より）



炭窯状遺構C-D土層断面（北西より）

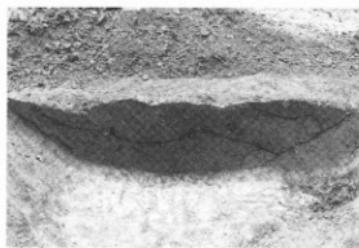
図版4 溝状遺構・調査風景



溝状遺構全景
(南東より)



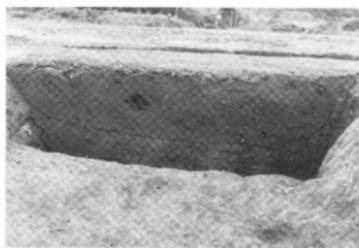
調査風景
(第3号住居址・
溝状遺構)



溝状遺構A-B土層断面（北西より）



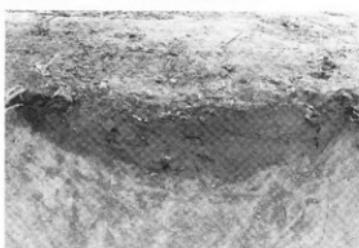
調査風景（縄文時代調査区）



溝状遺構C-D土層断面（南東より）

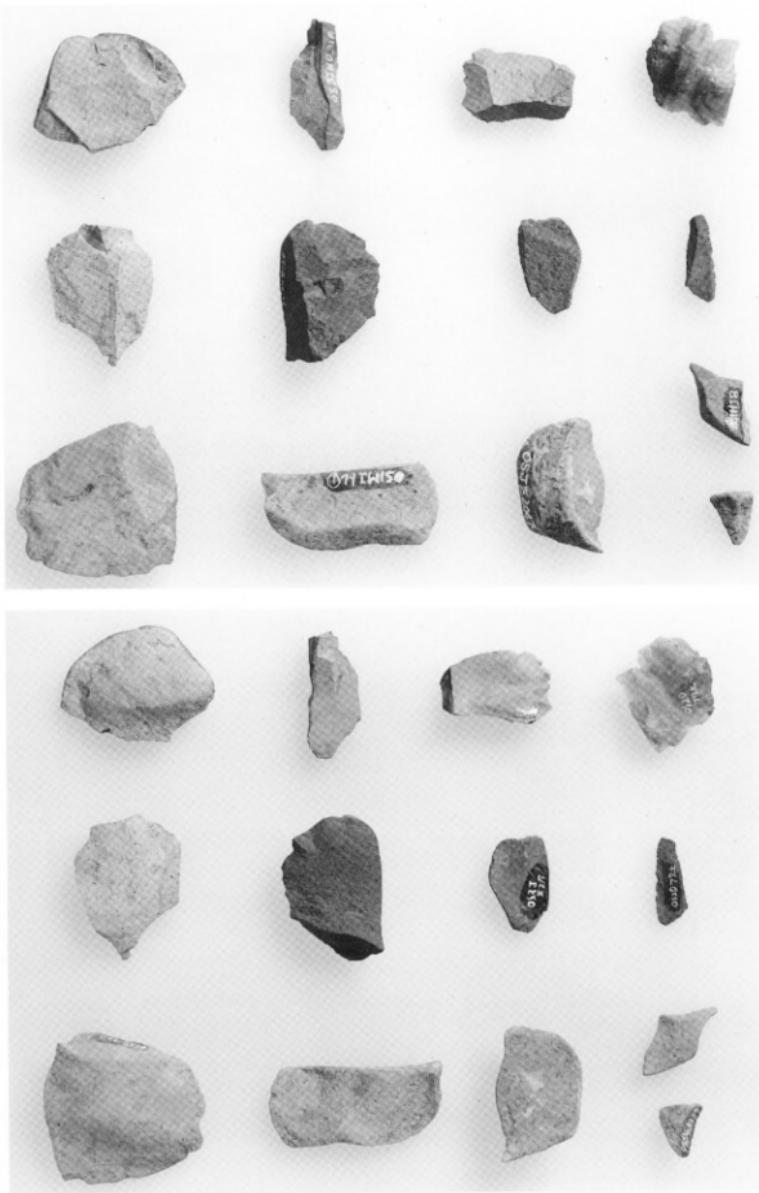


調査参加者



溝状遺構E-F土層断面（北西より）

図版5 石器①・②



図版6 繩文土器①・②



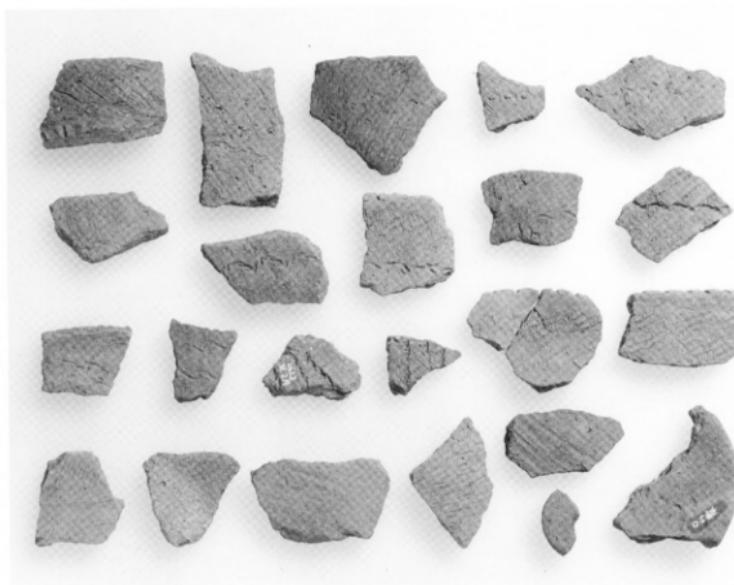
図版7 縄文土器③・④・⑤



図版8 繩文土器⑤・⑥



図版9 繩文土器⑦・⑧



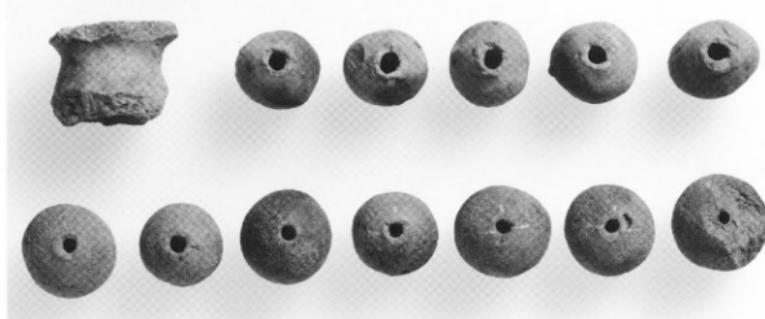
図版 10 橫穴状遺構・土坑出土遺物・他石器



图版 11 第 2 号住居址出土遗物



图版 12 第3号住居址・炭窯状遺構出土遺物



第18図5 土器に残る布目状痕跡



報告書抄録

フリガナ	オキツシライイセキ						
書名	興津白井遺跡						
副書名	美浦村水処理センター建設に伴う埋蔵文化財の調査						
シリーズ名	美浦村教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	9						
編著者名	川村 勝						
編集機関	美浦村興津白井遺跡調査会						
発行機関	美浦村教育委員会・美浦村興津白井遺跡調査会						
発行機関所在地	〒300-0424 茨城県稻敷郡美浦村受領1460-1 Tel 0298-85-7631						
発行年月日	西暦2000年3月31日						
フリガナ 所取遺跡名	フリガナ 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村 遺跡番号						
おきつしらい 興津白井 遺跡	いばらきけんいなしきぐんかほ 茨城県稻敷郡美浦 むらおおあざおきつあざいり 村大字興津字白井 969番地外	084425	35度 59分 30秒	140度 17分 44秒	19990614 ～ 19990721	約5,000 m ²	美浦村水処理 センター建設 に伴う調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
興津白井 遺跡	集落 ・ 包蔵 地	旧石器時代 ・ 縄文時代 ・ 古墳時代 ・ 平安時代 ・ 近世 ・ 時期不明	遺物包含層 ・ 竪穴住居址1基 ・ 竪穴住居址1基 ・ 炭窓状遺構1基 ・ 竪穴状遺構1基 土坑 2基 溝状遺構 1条	縄文土器(早期～後期)・上 師器・須恵器・剣片・打製 石器・スタンプ形石器・磨 石・土製耳飾・球状土鍤・ 土製円盤		古墳時代の住居址より中期の 良好な一括遺物	
					古墳時代・平安時代の住居址 から検出された炭化材同定		
					テフラ分析でAs-B検出		

美浦村教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書

茨城県稲敷郡美浦村

興津白井遺跡

～美浦村水処理センター建設に伴う埋蔵文化財の調査～

発行 2000年（平成12年）3月31日

編集機関 美浦村興津白井遺跡調査会

〒300-0424 茨城県稲敷郡美浦村受領 1460-1

美浦村教育委員会内 TEL 0298-85-7631

発行機関 美浦村教育委員会

〒300-0424 茨城県稲敷郡美浦村受領 1460-1

TEL 0298-85-7631

美浦村興津白井遺跡調査会

印 刷 株式会社フサヒビジネス

〒314-0022 茨城県鹿嶋市長柄 1879-275

TEL 0299-84-6121

